

タイトル	M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(25)
著者	寺田, 吉孝; , ; 安田, 節彦; ,
引用	北海学園大学学園論集(177): 49-90
発行日	2018-11-26

# M. M. ドブロトウヴォールスキーの アイヌ語・ロシア語辞典 (25)

(カザン, 1875年)

M. M. ドブロトウヴォールスキー著  
寺 田 吉 孝 訳  
安 田 節 彦 訳

## 訳者まえがき

前回に引き続き、補遺の訳出である。今回は、補遺の2. の「アイヌ関連文献からの抜き書き」、3. の「アイヌの人口」、4. の「アイヌの宗教、哲学、詩歌」である。

今回の訳出部分には固有名詞が数多くある。原文においてキリル文字で書かれている場合は、カタカナ（日本語の読み）、ラテン文字（キリル文字からの転写）とキリル文字を併記する。原文においてラテン文字で書かれている場合は、カタカナ（日本語の読み）とラテン文字のみ記載し、キリル文字（ラテン文字からの転写）は記載していない。

「アイヌの宗教、哲学、詩歌」で用いられているアイヌ語の語の多くには意味が書かれていないが、そのほとんどは、本辞典の本編の辞書に記載されている。一つ一つ辞書で確認しながら読むとなるとかなり大変なので、訳文では、本編に掲載されている頁数、通し番号と語意等を注として書き入れた。

また、「アイヌの宗教、哲学、詩歌」においては、道具、帽子の絵や、月の満ち欠けを表す図等が描かれている。かなり不鮮明なものだが、書き換えずにそのまま文中に挿入した。

(寺田吉孝 記)

## 2. アイヌについての抜粋<sup>(1)</sup>

1. 『ブロートンによる発見の航海 (Voyage des découvertes par Broughton<sup>(2)</sup>)』1807年, 320-321頁。

「ラクスマン (Laksman, Лаксманъ) 海軍大尉は, ラペルーズ (la Pérouse, Лаперуз) と意見を同じくしている。ラクスマンは, この著名な航海者と同様, クリル諸島, マツマイ<sup>(3)</sup> (Matsmaj, Мацмай) とサハリン島の住人は共通の起源をもち, アジア大陸の近隣地域の諸民族とも, 日本人とも, まったく異なると考えている (Voyage. t. 3. p. 114)」。

2. 『ペトロフの東方諸語の最も重要なアルファベットについて (О важнѣйшихъ алфавитахъ восточныхъ языковъ Петрова)』モスクワ, 1855, 10-11頁。

d) 日本語の諸文字。そのうちの二つ目は日本の聖典の言語で用いられている。その文字の字形は中国語と同じだが, 発音はまったく異なる。平民はこの文字を解さない。二つ目は, 民衆の日本語 (народный Японский<sup>(4)</sup> язык), より正確には, ニッポンノコトバ (Nipponno-kotoba, Нипонно-котоба)<sup>(5)</sup> のために使われている。この文字も上から下に書かれる。二つ目の文字には, 2種類の音節アルファベットがある。1つは, カタカナ (片方からなる文字) という呼び名で知られ, 47の音節 (イ, ロ, ファなど; これらの音節にしたがって, そのアルファベット自体も, 日本語で「イロファ<sup>(6)</sup>」と呼ばれる) を含んでいる。それは紀元8世紀の前半に日本の伯爵の吉備<sup>(7)</sup> によって中国語の文字から作り変えられた<sup>(8)</sup>。彼はデーヴァナーガリのアルファベット (дэванагарскій алфавитъ)<sup>(9)</sup> も知っていたと考えられている。8世紀末には, 学僧コ・ボ (Ко-бо)<sup>(10)</sup> が日本に現れた。彼は, 新しい音節アルファベットを発明した。それは, 48の音節を含み, フィロカナ<sup>(11)</sup> (firo-kana, фиро-кана) 「平らな文字」という名で現在まで呼ばれている。それは

(1) 編者注: これらの抜粋は, 叙述自体からも分かるように, 独立した集成として仕上げられている。アイヌ・ロシア語辞典の著者の死後, これらの抜粋に入っていない多くの草稿が残されたが, それらはアイヌに関するものではなく, すべてサハリン島に関するものである。

(2) 『S.M.B. のコルベット艦「ラ・プロヴィダンス」とその同行船を指揮する船長 W.R. ブロートンによって 1795年, 1796年, 1797年, 1798年に行われた太平洋北部における発見の航海 (Voyage des découvertes dans la partie septentrionale de l'Océan Pacifique, fait par le Capitaine W.R. Broughton, commandant la corvette de S.M.B. la providence et sa conserve, pendant les années 1795, 1796, 1797 et 1798)』海軍・植民地大臣 S.E. の命令により J.B.E. が翻訳, パリ, 1807年, 全2巻。

(3) 松前のこと。ここでは北海道を指しているのであろう。

(4) японскийではなく, Японский と書かれている。

(5) 「日本の言葉」のことであろう。

(6) 「イロハ」のこと。

(7) 右大臣の吉備真備を指しているのであろう。

(8) 吉備真備がカタカナを作成したというのは, 伝説に過ぎない。

中国語混じりではない純粹の日本語で書かれるような文を書くためにのみ使われる。他の資料によれば、そのアルファベットは全部で47の単純な音節（それらの多くは2つずつおよび3つずつの記号を持つ）と254の複雑な音節（たとえば, it. fat. fet. nat. sut など<sup>(12)</sup>）を含む。この数の多さと並外れて凝った字形は、このアルファベットの学習を難しくしている。これらのアルファベットの他に、さらに二つの古来から続いているものがある。一つは, Ziak-so<sup>(13)</sup>（ジアクーソウ）によって発明され、もう一つは、マニョーカナ（Manyô-kana）あるいはマニオ（Manio）すなわち「万の（葉）」（有名な歌集）の文字と呼ばれている<sup>(14)</sup>。一方、中国の文字は、日本語でシン・ジ（Sin-zi）、のちにカン・ジ（Kan-zi）（秦および漢の字）と呼ばれ、紀元後3世紀、Ozintenô<sup>(15)</sup>「オジテンノー」時代に導入された。同じく中国語の文字から簡略化されたヤマト・カナ（Yamato-kana, Ямато-кана）も稀に使われている。

3. 『絵のような日本（Живописная Японія）』エメ・ギュンベラ（Eme Gyumbera, Эме Гюмбера）、サンクト・ペテルブルグ、1870年、41頁。

「日本民族の起源に遡ると、侵略者の遊牧国ではなく、沿岸や大洋の北方の島々に分散して住むアイノス（Ainos, Аинос）（「人」を意味するその土地の表現）という名の漁労と狩猟を営む平和的な種族に出会う。アイノスの顔立ちはまったくモンゴルのではない。目は斜めに穿たれてはいないし、細くもない。頬骨は突き出しておらず、髭は薄くない。反対に、この種族は、概してがっしりしていて、大きな丸い頭を持っている。そして特に体毛が極めて濃いという特徴がある。彼らを見ると、穴ぐらの熊と同時代人に当たるのではないかという疑問が思わずわく。イエソ（Ieso, Ieso<sup>(16)</sup>）の沿岸でアイノスを観察したことがあるアメリカ人の地質学者ビクモル（Bikmor, Бикмор）は、彼らを我が偉大なるアーリア民族の一つに加えている。もしそうなら、彼らは自分たちの居住地から他の種族を追い出すかわりに、外国の侵入によって追い出された、おそらく、唯一のアーリア人の一派の子孫であるだろう。見かけ上深く根を張っていたケルト人がイギリスのいくつかの伯爵領から姿を消したように、アイノスもクリル諸島やサハリン島やイエソにおいて昔から自分達のものであった土地を少しずつ失いつつある。アイノスの数は1万人とか1万2千人にも達していない。しかし、彼らについての記憶は日本人の尊敬の念に今にいたるも残っている。現在においてもまだ、最も贅沢な宴会であっても、アイノスの原初の食べ物と言われている。

(9) ヒンディー語やネパール語などの表記で用いられるアルファベット（Devanagari alphabet）。

(10) 弘法大師のことであろう。

(11) 平仮名のことであろう。

(12) イッ、ファッ、フェッ、ナッ、スッなど、促音を含む音節を指しているのだろう。

(13) 禪僧のことか？

(14) 万葉仮名のことであろう。

(15) 原文では、Даири (Dairi) Ozintenô と書かれている。Даири (Dairi) は内裏、Ozintenô は、応神天皇のことであろう。

(16) 「蝦夷」のことであろう。

るありきたりの貝が先祖を記念して供される。アイノスの名はいかなる軽蔑の類のものをもたらししていない。日本語には、ギリシア人が描く蛮族のイメージと同様のものを表す表現もあるが、それはアイノスではなく、イエビス (iyebis, ieбисъ)<sup>(17)</sup> と言われる。それにもかかわらず、もし日本君主国の創始者たちが戦わなければならなかった野蛮民族がイエビスという名で知られており、アイノス族には属していなかったのであれば、以下の疑問が生じる。イエビスはアイノスと一体どこが異なるのか、双方の起源はどこにあるのか、さらには、イエビスを打ち負かした者や征服者はどこから来たのか」。

4<sup>(18)</sup>. 「サハリンへの旅 (Поѣздка на Сахалинъ)」 Fr. Bogd. シュミット (Shmidt, Шмидт<sup>(19)</sup>) (Beiträge zur Kenntniss des Russischen Reichs. Bd. XXV)。

北方の最初のアイヌの村は、同名の川と岬のほとりにあるクタウジ (Ktauzi, Ктаузи) である。ここでは、人々はギリヤークのように髪を後ろで束ねている (南の地域のように髪を切っていない)。また、日本人から完全に自由である。ここでは、近くにある断崖絶壁で、イナウ (Inau's) を見かける。イナウとは、ギリヤークの村によくあるように、先端が削られてカールし、熊やアシカの頭蓋骨が突き刺された棒のことである。イナウは、山とくに危険な崖に置かれ、いけにえ (供物) の印になる。

シュミットは、ピレヴォ (Pilevo, Пилево)<sup>(20)</sup> 川でポプラの幹をくり抜いて作られた舟が目に入った。このような舟はトゥイミ (Tumi, Тыми)<sup>(21)</sup> でも東岸のポロナイ (Poronai)<sup>(22)</sup> でも使われている。

ナヨロ (Најоро, Найоро)<sup>(23)</sup> には、日本人からサーベル (сабля) を贈られた老人のスセトクレロ (Ssetokurèro) と息子のカンチオマンチ (Kanchiomanti, Канчиоманти) がいる。老人の父親は、シャニシン (Syan'sin, Сяньсин)<sup>(24)</sup> で満州族からアイヌの族長を名乗ることを証する書状を与えられた (彼は人頭税を持ってそこへ通った)。スセトクレロは酒盛りをする際に、漆の箸で髭を持ち上げた。ミッソ (misso, миссо)<sup>(25)</sup> というのは、酸味の強い豆から作られたピリッとした味の粥状のものである。日本人はそれを米の飯につける。魚には彼らは日本のソヤ (soja)<sup>(26)</sup> か

(17) 「えびす」のことであろう。

(18) 原文では、3. と記載されているが、実際には4. とすべきところだろう。

(19) Фёдор Богданович (Фридрих Карл) Шмидт

(20) 本辞典 p.251, 5632 番目の語として掲載されている。クタウジの南方にあるアイヌの村の名。

(21) 本辞典 p.355, 7952 番目の語として掲載されている。シウ (Siu, Сіу) 川の上流地域にあるギリヤークの村の名。

(22) 本辞典 p.261, 5857 番目の語として掲載されている。マヌヤ (Мануя, Мануя) の南方 20 露里のところにある川と同名のアイヌの村の名。

(23) 本辞典 p.182, 4083 番目の語として掲載されている。マヌヤ (Мануя, Мануя) の北方 131 露里のところにある川と同名のアイヌの村の名。

(24) 西安のこと。

(25) 味噌のことであろう。

らつくったソース<sup>(27)</sup>と大根の葉を加えて食べる。

エンドウゴモ (Endungomo, Эндунгомо) あるいはマウカ (Маука, Маука)<sup>(28)</sup> あるいはトゥナイ (Tunaj, Тунай) には, 40 軒のアイヌのユルタ (家), 10 軒の日本人の家屋と舟や漁具などの修理場がある。

5<sup>(29)</sup>. 「レオポリド・シュレンク (Leopol'd Shryenk, Леопольд Шренк) のアカデミー常任書記への手紙」『帝国ロシア地理学協会紀要』1857年, 第1巻

テルベニエ (Terpenie, Терпение) 湾<sup>(30)</sup> からピミ (Pimi, Пими) (トモ (Томо, Томо)<sup>(31)</sup>) へやって来るのは, 日本の品物をもったアイヌ, 毛皮や獣の獲物をもったオロッコ, アザラシの肉や毛皮をもった両岸に住むギリヤークである。さらに, 大陸や海辺に住むギリヤークやアムールに住むマンゲーンも同じく, 満州やロシアの産物をもってやって来る。その目的は, そこで<sup>(32)</sup> 保存用に調理される魚や魚の干物 (一部は, そこへ運び込まれた外国の品物も) を蓄えるためである。

帰途, シュレンク (Shryenk, Шренк) は犬の餌を手に入れることができず, 小魚の Wachana Pall<sup>(33)</sup> で代用した。自身もこの魚を常食としていた。なぜなら貯えがすべて尽きていたからだ。

6<sup>(34)</sup>. 「ブルイルキン (Brylkin, Брылкин) のサハリンからの手紙から」(『帝国ロシア地理学協会シベリア支部紀要』第7巻, 1864年)

マウカ (Маука, Маука) では多くの日本人やアイヌと知り合いになった。彼らは, 厳禁されているにもかかわらず, ウォッカ<sup>(35)</sup>, キャンディ, タバコやその他の細々した物をロシア人に売っていた。法を執行する監督官自身がさまざまな小間物を運んで行き, ロシア人にお金や物をせびっていた。日本人を満足させるにはごちそうするのが一番だった。

アイノ (Aino, Аино) 族つまりアイヌは, タライカ (Tarajka, Тарайка)<sup>(36)</sup> 湖およびホグラナ

(26) この場合は, 大豆のことであろう。

(27) この場合は, 醤油のことであろう。

(28) 本辞典 p.165, 3697 番目の語として掲載されている。クスナイ (Kusunai, Кусунай) の南方 107 露里のところにアイヌと日本人の混住の村の名。エンドウゴモともトゥナイ (Tunaj, Тунай) とも言う。

(29) 原文では, 4. と記載されているが, 実際には 5. とすべきところだろう。

(30) サハリン南東のオホーツク海に面した湾の名。

(31) 本辞典 p.330, 7420 番目の語として掲載されている。オホーツク海に注ぐ北サハリンの大きな川の名 (トゥイミとも言う)。シュレンクでは, ピミとも呼ばれている。

(32) ピミ (あるいはトモ) を指しているのであろう。

(33) 不明。商品名か?

(34) 原文では, 5. と記載されているが, 実際には 6. とすべきところだろう。

(35) ここでは焼酎のことであろう。

(36) 本辞典 p.320, 7166 番目の語として掲載されている。(地名) マヌヤの北方 173 露里にある湖とアイヌの村

(Khograna, Хограна) 村, より正確にはウスリ (Usuri, Усури)<sup>(37)</sup> から始めて, サハリンの南部全体を占めている。なぜなら, この村よりも北には, 日本人の支配を逃れるために, つい最近故郷を後にしたアイヌの移住者のみが暮らしている。

この種族の言語も外見もわが国で暮らす他の種族と共通のものはまったくない。少しつり上がった小さな目, 少し突き出た頬骨, ふ厚い唇は, いくらかツングースの顔つきを思わせる。しかし, この類似も, 丸い, 程よい大きさの鼻と突きでた眉間とによって, 損なわれる。完璧に整った美しく濃い黒髭の人がしばしば見受けられる。このことは, ゴロヴニン (Golovnin, Головнин) が的確に指摘しているように, 彼らをロシアの農民に似せている。男も女も髪の毛は黒く濃い。男は体毛の発育が著しく, 成人になると胸や腹や手足は濃い毛で覆われるのがふつうである。身体は浅黒く, 中背で, たくましい体格をし, 堂々としていて, 手足がかなり小さく, しっかりと落ち着きはらった歩き方をする。

男も女も髪の毛を首まで伸ばし, 丸く刈っている。男は頭の前の部分を額からほぼ頭頂まで剃るか, すっかり刈っている。一方, 女は真ん中分けしている。女は, 唇に煤で色をつけている。色が落ちないように, 唇には予めナイフでかき傷をつけている。

夏, 男たちはゆったりとした膝まである, ごわごわした黄色みがあった布地の上衣を着ている。その布地は, ある樹木 (楡と思われる) の繊維から女たちが織ったものである。

冬は, アザラシか犬の皮でつくった同じような上衣かカフタン<sup>(38)</sup> を着て, 犬の皮のズボンとアザラシの皮の長靴<sup>(39)</sup> を履いている。そして, この長靴は, その上部を膝の下のところで縛る。

帽子は, 夏には決して被らず, 冬の寒い時にだけ, 頭巾で頭を包んだり, マンゲーン<sup>(40)</sup> の女性用のカーポル<sup>(41)</sup> (капор, капор) によく似た布製の帽子をかぶったりする。低い位置で締められた帯, それに吊るされた二本のナイフ, ホクチタケ, 煙管の袋, 時には煙管入れ (日本製) や結び目を解くための鹿の角 (彫り物が施されている), これらが男の装束を補う。女は, 夏も冬も男と同じ裁ち方のアザラシのカフタンを着ている。ただし, そのカフタンは男性のものよりも少し長い。他の衣服は, 小さな違いがあるものの, 男の衣服と似ている。イヤリングや指輪は, 男も女も身につける。女は, たくさんの指輪や腕輪を糸に通して作る。裕福な者は銅の留め金で飾られた帯をし, 衣服にたくさんの金属のボタンを縫い付けている。

アイヌの住居は, 針葉樹の樹皮で作られ, 切妻屋根がついている。内部には, 板やむしろが打ちつけて張られている。三方の壁の周囲には幅広くない板寝床が並び, 床には板が敷かれ, 中ほ

(37) 本辞典 p.378, 8471 番目の語として掲載されている。(地名) (ヴェントゥヴェサンとも言う) クスナイの北方 97 露里にあるアイヌと日本人の混住の村。

(38) 裾の長い男性用のコート。

(39) 原文では, тарбаса と書かれているが, тарбаса 「(毛を外側にした) トナカイなどの皮で作られた長靴」のことであろう。

(40) 沿海州のアムール河畔に住むツングース系部族の名。

(41) (顎の下で紐を結ぶ子供・婦人用の) 帽子。

どに炉が切られていた。そして、その炉では絶えず薪が燃えている。煙は屋根に作られた穴から出ていく。この質素な家の前にはふつう小さな玄関口がある。これらの住居はかなりきちんと整っているが、冬の屋内はかなり寒い。アニヴァ (Aniva, Анива) の近郊やタライカ (Tarajka, Тарайка) ではアイヌは穴小屋をもっている。

アイヌはおもに漁労を営む。狩猟を生業とする者は少ない。すべての獣には、石弓を向け、熊は、銚や弓でも撃ち殺す。アザラシは、長さが5サージェン<sup>(42)</sup>以上の長さの細い木につけられた銚で捕獲する。

食料となっているのは、米、魚、クロテン、犬、アザラシである。ここでは4月から豊かな漁が開始される。アイヌは冬の貯えに魚の干物をつくる。たびたび鯨が岸に打ち上げられるが、アイヌはその肉を食用にする。

彼らは多くの神を崇拜し、熊を神と崇める。彼らの主たる神は太陽である。シャーマンは彼らの中では極めて稀である。

アイヌの性格はおとなしく、温和で、社交的である。彼らの多くはずる賢い。皆が総じて怠け者で、暢気である。しかし、これらの欠点は利発さと人の良さによって補ってあまりがある。

日本人のところでのアイヌの仕事には賃金が払われるが、ある時は、賃金の代わりに彼らにとって必要な品物、例えば、米、布地、タバコ、木製の食器、釜やさまざまな小間物を受け取る。すべての品物はしかるべく値が決められ、アイヌはそれらの中から彼らに必要なものや気に入ったものを手に入れる。支給に際して、役人達全員の立会いの下で品物の良し悪しが試される。

アイヌの仕事はまったく面倒なものではない。彼らの大部分は薪を割ったり、日本人の手伝いで魚を獲ったり、板を鋸で挽いたり、鉋で削ったりする。彼らが罰せられるのは、著しい過失に対してだけである。ついであるが、ロシア人との交際に対しては罰せられる。日本人はアイヌの物質的な生活の向上に配慮するだけでなく、彼らの啓蒙についても努力している。多くのアイヌに日本人はすでに読み書きを教えている。

オロッコ (アイヌ語でオロフコ (Orokhko, Орохко)) はアイヌと取引をしている。毎年、マヌヤ (Мануя, Мануя) ヘアザラシの脂、肉や毛皮を持ってきて、それらをタバコや米と交換している。

アイヌとの物々交換の最上の品物は布地である。例えば、錦、青錦、更紗やアイヌがとても必要としている暖衣に適した布地 (兵隊ラシャ<sup>(43)</sup> やフランネル) である。黒っぽい布地は汚れが目立たないので、アイヌは好んで手に入れる。その他に、満州製の喫煙用パイプ (クロテン1匹の値がする)、満州製の強いタバコ、さらにもっと良いのは、ロシア製のタバコ、弓の射撃用の輪<sup>(44)</sup>、飾り板のついた馬具の留め金、水色や赤や白や黄色のビーズや南京玉、火打ち金、銅の櫛、小さ

(42) ロシアの古い長さの単位。約2.134メートル。

(43) 灰色の外套用ラシャ

(44) どういうものか不明。



くて丈夫な金属製のボタン、さらに、外国製の男物と女物のイヤリングなど。

琥珀がマヌエ (Manue, Мануэ)<sup>(45)</sup> より南の海岸に打ち上げられ、アイヌはそれでボタンをつくる。この琥珀は質が悪く、小さなかけらしか見つからない。

チカペルグナイ (Chikapergunaj, Чикапергунай)<sup>(46)</sup> ではアママ-サキ (amama-saki, амама-саки) (コメのウオッカ) が振舞われた。それは、次のようにして作られる。米の粥を煮て、熱湯で薄め、米麴を加え、発酵させる。5, 6日後、ややすっぱい、真っ白で濃い飲み物ができあがる。とても旨く、いくら酔いをさそう。

この飲み物を6杯以上飲むと、アイヌは陽気になり、多弁になる。その中の一人が座興に唄を歌い始めた。彼が歌うのをやめるとすぐに、すべてのアイヌが声を合わせてケケ (ke, ke) 「さあ、さあ」ということばで彼を煽り始め、際限なく唄は続いた。これは即興の唄であった。そのアイヌは自らの旅 (彼は他所からやってき人間だった) を語り、聴衆の多幸を祈って終った。歌詞の一行ごとに pori (khorī) duj, duj のリフレインが繰り返された。この即興の唄のメロディーはタタール・モンゴル・ツングース風 (もしこう言えるなら) だった。これと同じ旋律をわが国のタタールやブリヤートのところで、また、満州人やウスリーのホゼプ (Khodzer, Ходзеп)<sup>(47)</sup> のところで耳にする。子孫の記憶に生きる唄をアイヌは持っていないようだ。ブリルキン (Brylkin, Брылкин) は彼らから聞いた子守唄を一つだけ書きつづった。その歌のほぼ全体が何の意味もたない、ただリフレインとして用いられるだけの単語で構成されている。

アイヌの家はツイセ (tsise, цисэ) と呼ばれる。冬、家の中は、外の気温より2, 3度高いだけだ。アイヌは、丸裸になって、板寝床で丸まって横になり、そして、犬の毛皮で作った丈の短い服だけで身を包み、零下18度、20度の寒さの中で一晩中ずっと眠る。とくに寒さに強いのは老人たちだ。若い世代は、一度に4枚も重ね着する日本の上衣に子供の頃から慣れている。新たな条件の影響のもとで、若い世代は肉体的に父親たちより弱くなったので、風俗習慣の純粋さや勇敢さを失い、弓やモリをもって勇敢に熊に立ち向かうような猟師は老人にしかない。

アイヌは、ロシアや日本のヴォッカを愛するが、度を越すということはない。

カスプツイ (Kasputsi, Каспуци)<sup>(48)</sup> やヴェンコタン (Venkotan, Венкотань)<sup>(49)</sup> では、食器はアイヌ製だった。というのは、ここのアイヌは日本人のために働いてはいないからである。水は大きな入れ物 (白樺の樹皮でつくった袋) に溜められていた。食事のためには、イパボ (ipabo, ипабо) 「平らで細長い木製の椀」や深くて丸い椀や美しい小匙が使われた。これらの品はすべてとても

(45) おそらく、マヌヤ (Manuya, Мануя) のことであろう。

(46) 本辞典 p.421, 9488 番目の語として掲載されている。チカペロフナイ (Chikaperoxhnaj, Чикаперохнай) 「マヌヤの北方1.5露里にある川とアイヌの村」を参照するよう指示がある。

(47) 不明。

(48) 本辞典 p.123, 2699 番目の語として掲載されている。カシプ (Kas'pu, Каспу) 「マヌヤの北方50露里のところにある川とアイヌの村」。

(49) 本辞典 p.48, 932 番目の語として掲載されている。マヌヤの北方71露里のところにあるアイヌの村。

丁寧につくられ、ある種の優雅ささえ湛えられた素朴な絵で飾られていた。見事な彫り物が施された生活道具もある。この種の細工には、彼らは大きな能力を発揮する。彼らは、斧や小さな曲がったナイフを並外れて迅速かつ巧みに操って、極めて繊細な仕上げのスプーンから犬ぞりやスキーにいたるまで、彼らの生活に必要なあらゆる品々をつくる。オロフコ (Orokko, Орохко) のつくる品々はすべて白樺の樹皮でつくられ、驚くほど凝った模様で飾られている。それらは、アムール川のマンガーンの生活道具や衣服に見られるものときわめて似ている。

卑猥な言葉、冗談、会話は男だけでなく女をも喜ばせる (日本人の影響、その日本人のほぼ全員が独身である)。

タライカ (Тарайка, Тарайка) には自由なアイヌが住む。彼らの美しい顔立ち、小ざっぱりした衣服、快適で広々とした家屋、すべては彼らの物質的な豊かさを示している。日本人との接近のために最終的に零落した南の同郷人と比べると、彼らはまったく別の種族のように見える。しかし、彼らにも同類の悲惨な運命が待ち受けている。日本人は、すでにブリルキン (Brylkin, Брылкин) がいたところに、シスイカ (Sis'ka, Сиська) を占領し、間違いなく現在では豊かなタライカをすでに支配下に置いている。

シスイカからの道は、シスイカ川沿いにギリヤークの村トゥイミ (Туми, Тыми) まで延びている。トゥイミ村からは、ドゥーイ (Дуй, Дуй) の上流 15 露里のところにある山を越えて東岸に出る。シスイカ村からトゥイミ村までの 200 露里の間には、わずか 2 箇所だけにツングース (オロケス) の家屋がある。この 200 露里の間に、われわれはギルヤーク人の家族に絶え間なく遭遇した。彼らは食べていくためにタライカやシスイカへ全財産を抱えて移住するのだった。

7<sup>(50)</sup>. 『サハリン島の地形観察』ルダノフスキー (Rudanovskij, Рудановский) (Вост. Пом. 1 и 15 ноября и 1 декабря 1866 г. №№ 21, 22 и 23)。

アイヌは言語、衣服、習慣、顔つきにおいてクリル人と同一種族である。アニヴァ (Aniva, Анива) では、彼らは男女合わせて 167 人、オホーツク海沿岸では男女 473 人、タタール海峡沿岸では 1207 人、南部全体で男女合わせて 2418 人である。1857 年の名簿では、アイヌは 2479 人だった (350 の家屋, 95 の村)。

8<sup>(51)</sup>. 『カムチャッカ地誌』科学アカデミー教授 St. クラシェニンニコフ (Krasnyennikov, Крашенинников), サンクト・ペテルブルグ, 1755 年

(50) 原文では、6. と記載されているが、実際には 7. とすべきところだろう。

(51) 原文では、7. と記載されているが、実際には 8. とすべきところだろう。

クリル列島<sup>(52)</sup>；クシ (Kushi, Куши) という民族が定住している。その民族は、ロシア人の間ではクリル (Kurili, Курилы) と呼ばれている。

① ショウムシチュ (Shóumshchu, Шоумшчу)：この島にはクリル人の住居がある。

a) アシフルピシプ (Ashikhurupishpu, Ашихурупишпу) 川を見下ろす地

b) ホルピシプ (Khórupishpu, Хóрупишпу) 川を見下ろす地

c) モエルプトム (Moérputom, Моёрпутом) 川を見下ろす地。

島の全住民は44人である。島とカムチャッカの間の海峡では、引き潮の時、最も穏やかな天候でさえ高さが20から30サージェン<sup>(53)</sup>になることもあるほど大きな白いしぶきを伴う大波<sup>(54)</sup>が走る。コサックはその大波をスヴォイ (Suvoy, Сувой) 「雪のふきだまり」またはスロイ (Suloj, Сулой) 「急流、渦潮」と呼び、シュテッレル (Shtyellyer, Штеллер) の言うところによると、クリル人はコガチ (Kogach', Когачь), つまり「背骨」と呼ぶ。それらは、カムイ (Kamuj, Камуй), つまり「神」とも呼ばれる。なぜなら、その巨大さから神そのものとして崇められていて、舟を漕いでスヴォイを通るとき、無事に渡り、沈没を免れるように、それに供物として見事な出来栄の小船を投げる。その時、船頭は絶え間なく魔法をかけているように見える。104-105<sup>(55)</sup>。『東シベリアの地図 (1860年)』ではこの島はシムムシュ (Shumshu, Шумшу) と呼ばれている。

② ポロムシル (Póromusir, Поромусир)：この島の疑いのない住民であるクリル人はオンネクタ (Onnekuta, Оннекута) 島から移住した。ステッレル (Steller, Стеллер) の見解によると、遠くの島々の住人がオンネクタ島にやってきて、その土地の住人達から女性や子供を奪って連れ去ったというのが理由かもしれないとのことである。クラシェニンニコフは、この島から漆の盆、酒盃、日本刀および銀の指輪を受け取って、帝国立クンスト・カメラに送ったが、それらの品は、クリル人が日本以外からは得ることができないものだった。住民は湖を見下ろす土地に住んでいる。その湖の周囲は5露里ほどあり、また、その湖からペトゥプ (Petupu, Петпу) という名の小さな川が海へと流れている。上述の二島の住民は頻繁に起こる激しい地震や洪水にさらされている。『東シベリアの地図』では、パラムシル (Paramushir, Парамуширь)。

③ アイエイノゲン (Ayeinogen, Аеиногенъ) 島、クリル語でウヤクジャチ (Uyakuzhach', Уякужачь) 「背の高い石」、コサックの間ではアライド (Alaid, Алайд)。この島は、とても高い一つの山からなる。晴れた日には、その頂上からは噴煙が見られる。ステッレル (Styellyer, Стеллер) は、アライドについて次のようなクリル人の言い伝えを書いている。昔、この山は大きなクリル湖の真ん中にあった。山はその高さゆえに他の山から光を奪っていたので、他の山々はたえずア

(52) 「千島列島」のこと。

(53) ロシアの古い長さの単位。1サージェン (сажень) = 2.134メートル。

(54) 原文では、валь съ бѣльи и засыпью と書かれている。

(55) 不明。おそらく頁数を示しているのであろう。

ライドに憤慨し、けんかをした。そのため、アライドは諍いから遠ざかり、海の中で孤立することを余儀なくされた。しかし、自分が湖にいた思い出として自らの心臓を置いていった。その心臓は、クリル語ではウチチ (Uchichi, Учичи) あるいはヌフグンク (Hukhgunk, Нухгункъ) 「へそ」、一方、ロシア語では「石の心臓」と呼ばれる。その石は、クリル湖の真ん中であって、円錐形をしている。アライドの道は、その旅行<sup>(56)</sup>の際に出来たオジョールナヤ (Ozyornaya, Озёрная)<sup>(57)</sup>川が流れる場所だった。というのは、山がその場から立ち上がったとき、湖の水が山を追って押し寄せて、海まで道を敷いたのだった。『東シベリアの地図 (1860年)』でもアライドと呼ばれている。

④ オンネクタン (Onnekutan, Оннекутанъ)。住民はポロムシル (Poromusir, Поромусир)の人々と交互に行き来しあい、ビーバーやキツネをもってポロムシルへ行き、自発的にヤサク<sup>(58)</sup>を支払っている。『東シベリアの地図 (1860年)』ではオネコカン (Onekotan, Онекоканъ)。

ミッレル (Miller, Миллер) では、ポロムシルに続いて、3番目がシリンキ (Sirinki, Сиринки), 4番目がウヤフクパ (Uyahkupa, Уяхкупа), 5番目がククミシャ (Kukumisha, Кукумиша) あるいはククミヴァ (Kukumiva, Кукумива), 6番目がムシャ (Musha, Муша) あるいはオンネクタン (Onnikutan, Онникутанъ), 7番目がアラウマクタン (Araumakutan, Араумакутанъ) (火を吐く山がある), 8番目がシヤスクタン (Siyaskutan, Сіяскутанъ), 9番目がイカルマ (Ikarma, Икарма), 10番目がマシャウチュ (Mashauchu, Машаучу), 11番目がイガトウ (Igatū, Игату), 12番目がショコキ (Shokoki, Шококи) (噂によると、日本人がこの島から大きな船で鉱石を運んでいるというが、どのような鉱石かは不明), 13番目はモトゴ (Motogo, Морого), 14番目はシャショヴォ (Shashovo, Шашово), 15番目はウシチル (Ushitir, Ушитиръ), 16番目はキトゥイ (Kituj, Китуй), 17番目はシムシル (Shimushir, Шимуширъ), 18番目がチルプイ (Chiruj, Чирпуй), 19番目がイトウルプ (Iturpu, Итурпу), 20番目がウルプ (Urup, Урупъ), 21番目がクナシル (Kunashir, Кунаширъ), 22番目がマツマイ (Matsmaj, Матсмай) となる。

NB.<sup>(59)</sup> 『東シベリアの地図, 東シベリア参謀本部の下で1855年作成, 最新の情報によって1860年に改訂, 増補』という表題の地図では、1番目のクリルの島としてシュムシュ (Shumshu, Шумшу) が示され、2番目がパラムシル (Paramushir, Парамуширъ), 3番目がシリンキ (Shirinki, Ширинки) (アライドが書かれているが、なぜか番号が付けられていない), 4番目がマカナルシ (Makanrushī, Маканруши) (この語は極めて判読しにくく印刷されている), 5番目がオネコタン (Onekotan, Онекотанъ), 6番目がハリムコタン (Kharimkotan, Харимкотанъ), これ以下の

(56) 山が湖の中から海へ移動したことを指しているのであろう。

(57) オジョールナヤ (Ozyornaya, Озёрная) は、「湖の」という意味の形容詞起源の地名である。

(58) シベリア等の非ロシア民族に課せられた毛皮・家畜等の現物税のこと。

(59) nota bene 「注意せよ」の略であろう。

島々は順番をつけずに地図に示されている。この地図に基づいて、クラシェニンニコフ (Krasheninnikov, Крашенинников) の勘定の続きを作成すると、おおよそ次のようになるだろう。6番目がマカナルシ (Makanrushi, Маканруши) (この語は「私は上流へ航行したい」を意味する)。7番目がハリムコタン (Kharimkotan, Харимкотанъ) (もちろん、これはミッレルのアラウマクタンである)。8番目がエカルミ (Yekarmi, Екарми)。9番目がチリンコタン (Chirinkotan, Чиринкотанъ)。10番目がシヤシュコタン (Shiyashkotan, Шияшкотанъ)。11番目がムシル (Musir, Мусиръ)。この島の傍にカーメンヌイエ・ラブーシュキ (Каменные ловушки) 「石の罟」と呼ばれる小島が地図上に示されている。12番目がラプコケ (Rapkoke, Рапкоке)。13番目がマトウア (Matua, Матуа)。14番目がラスシュア (Rasshua, Расшуа)。15番目がスレドネバ (Sredneva, Среднева) 島。16番目がウシシル (Ushishir, Ушисиръ)。この島の傍には、「姥石 (камень бабушкинъ)」と記されている。17番目がケトイ (Ketoj, Кетой)。18番目がシムシル (Simusir, Симусиръ)。19番目がプロトナ (Brotona, Бротона)。20番目がチルポイ (Chirpoj, Чирпой)。21番目がチルポイの兄弟 (Brat Chirpoyev, Брат Чирпоевъ)。22番目がウルプ (Urur, Урупъ)。23番目がイトウルプ (Iturup, Итурупъ)。24番目がクナシル (Kunashir, Кунаширъ)。

イトウルプとウルプのクリル人は自らをクィフ・クリルイ (Kukh-Kurily, Кыхъ-Курилы) と呼ぶ。クラシェニンニコフの見解によれば、より正確にはクィフ・クシ (Kukh-kushi, Кыхъ-Куши) である。その理由として次のように述べている。「なぜならクリル (Kuril, Курилъ) は、クシ (Kushi, Куши) という語がコサククによって損なわれて、変形されたからである」。ステッレル (Styeller, Стеллер) によると、日本に近い島々では、レモン、ボムボエ<sup>(60)</sup>、葦や毒草が育つ。毒草の根はサフランのように黄色く、ダイオウのように太い。クリル諸島の1番目の島の住人もその毒草のことを知っている。なぜなら彼らはその土地の住人から以前それを買ひ、矢に塗るために使っていた。それはギンボウゲである。簡単に傷を負う鯨やトドは、長く海中にすることができず、恐ろしいうなり声を上げて岸に身を乗り上げ、悲惨にも死んでしまう (p.209)。ブドウも育ち、それから葡萄酒がつけられる。地元の住人からその葡萄酒を手に入れたヴァルトン (Valton, Валтон) のところで、クラシェニンニコフもそれを飲んだ。

日本人の公表によれば、彼らの間では、最後の4つの島 (イトウルプ (Iturpu, Итуруп), ウルプ (Urur, Уруп), クナシル (Kunashir, кунашмръ) およびマツマイ (Matsmaj, Матсмай) のすべての住民は、イエゾ (Yezo, Езо) という共通の名で呼ばれている。このことから次のことが推論できる。第一に、マツマイの住人は昔の住人と同じ種族であり、四島すべての言語は一つである。第二に、イエゾは一つの土地ではなく、四つの島からなり立っている。イトウルプ (Iturpu, Итуруп) とウルプ (Urur, Уруп) は、その住民達がカムチャッカに近い島々の住民達と以前25年ないし30年ほど取引、商売を行っていた島である。この島々の住民がポロムシル (Poromusir,

(60) 原文ではбомбоеである。意味は不明。

Поромусирь) 島で数名捕虜としてとらえられ、カムチャッカに連れて行かれたことがあった。おそらく、そのことが航海と商売の中断の原因となったのだろう。しかしながら、日本人から得られる情報が捕虜たちを介して解説されたり、訂正されたりするために捕虜が必要だった。また、数名の捕虜が新たに集められる可能性もあった。

彼らの話によると、イトゥルプ島とウルプ島のクィフ-クリル (Кух-Курилы, Кыхь-Курилы) は、自分たちがそれぞれ持っている政府以外の他のいかなる政府も認めない。一方、マツマイ島は、ヨーロッパ人の旅行記の記述だけでなく、日本人の言うところにもよると、長く日本の支配下にあったことが分かっている。すべての島には、かつて連れ去られた多くのクリル人やカムチャダール<sup>(61)</sup> が奴隷の身分となって存在していると言われている。

日本の絹製品や紙は、あらゆる鉄製の日用品と同じように、クナシル (Kunashir, Кунаширь) 島の住人を通じてイトゥルプとウルプにもたらされる。それらは、クナシリ島の住人がマツマイの住人のところで交換しているのだ。ウルプ島とイトゥルプ島では日本人のところにあるものに似たイラクサ製の品物を織っている。しかも、カムチャッカの近くの島から持ってきたものや、自分のところにあるもの、古着の毛皮、干し魚、鯨油を日本人に売っている。鯨油はマツマイの住人が食用にしている、ヨーロッパ人の報告や旅行記の記述によれば、日本にも運ばれている。

クナシルの住人は、ステッレル (Steller, Стеллер) によると、絹製の長い服や中国製の服を身に着け、立派な髭を生やし、まったく身ざれいさは見られず、魚と鯨油を食べる。彼らの寝床はムシモン<sup>(62)</sup> の皮 (мусимоновы кожи) である。その皮はその地に十分にある。彼らは、日本の近くに住んでいるにもかかわらず、自分たちの君主がどのような君主か知らない。日本人は小さな船で彼らのところに毎年やって来て、鉄製のありとあらゆる物、銅製の釜、木製の漆の盆や椀、葉タバコ、絹や紙の錦を持ってきて、それらを鯨油やキツネ (カムチャッカのものより数が少なく、粗悪である) と交換する。クナシル人は、ロシア人に対して、マツマイ人がピグ (pig, пигь) と呼ぶ大きな大砲をもっているので、用心するよう言った。また、マツマイ人がやって来たのは北からではないのか、そして、彼らは、あらゆる者と戦って、あらゆる者に勝利できる力を誇る人々ではないのかと我々に尋ねた。クナシル人の言語は、クリル人のリパガ (Lipaga, Липага) (シュパンベルク (Shpanbyerg, Шпанберг) 船長の通訳) が断言するところによれば、ポロムシル (Poromusir, Поромусирь) 島のものと同じで、ほとんど何の変わりもない<sup>(63)</sup>。

(61) カムチャッカの原住民イテリメン人の呼称。

(62) 動物の名であるが、どういう動物であるかは不明。

(63) 原注: 草稿の中に私は二つの論文 a) 「サハリン島のアイヌ村落」6) 「サハリン島両岸」を発見した。それらを「アイヌについての抜粋」に追加するのが有益だと考えるので、ここに載せる。

### a) サハリン島のアイヌの村落

距離は、ベールキン (Byelkin, Бѣлкин) 氏とパーヴロヴッチ (Pavlovich, Павлович) 氏の地形測量に基づいて示されている。東岸はマヌヤ (Manuya, Мануя) 哨所から北方あるいは南方の距離が、西岸はクスナイ (Kusunaj, Кусунай) 哨所から北方または南方の距離が、南岸はカルサコフ (Karsakov, Карсаков) 村から西方または東方の距離が示されている。

村名など	起点からの方向	起点からの距離
タライカ (Tarajka, Тарайка)	(マヌヤの北方 <sup>(64)</sup> )	173 露里 <sup>(65)</sup>
タラン-コタン (Taran-kotan, Таранъ-котанъ)	(マヌヤの北方)	154 露里
シスイカ (Sis'ka, Сиська)	(マヌヤの北方)	149 露里
ナイエロ (Najyero, Найеро)	(マヌヤの北方)	131.5 露里
ペセト (Peseto, Песето)	(マヌヤの北方)	117.5 露里
コタンギス (Kotangis, Котангисъ)	(マヌヤの北方)	115 露里
ノネトウ (Nonetu, Нонету)	(マヌヤの北方)	113 露里
ニトウイ (Nituj, Нитуй)	(マヌヤの北方)	109.5 露里
コタントウル (Kotanturu, Котантуру)	(マヌヤの北方)	99.5 露里
シャフ-コタン (Syakh-kotan, Сяхъ-котан)	(マヌヤの北方)	98.5 露里
イル (Il, Иль)	(マヌヤの北方)	90 露里
シルトゥル (Siruturu, Сирутuru)	(マヌヤの北方)	78 露里
ヴェンコタン (Venkotan, Венкотанъ)	(マヌヤの北方)	71 露里
カスイプ (Kas'pu, Касьпу)	(マヌヤの北方)	50 露里
ダリリンプリ (Dal'rimpl', Дальримплъ)	(マヌヤの北方)	45 露里
グヌ (Gunu, Гуну)	(マヌヤの北方)	42.5 露里
ウリ (Uri, Ури)	(マヌヤの北方)	40 露里
モトマリ (Motomari, Мотомари)	(マヌヤの北方)	39 露里
クレツィスイ (Kuryetsis', Курецись)	(マヌヤの北方)	34.5 露里
ゴヤンキ (Goyanki, Гоянки)	(マヌヤの北方)	30.5 露里
マクン-コタン (Makun-kotan, Макунь-котан)	(マヌヤの北方)	26.5 露里
オチャセナイ (Ochasenaj, Очасэнай)	(マヌヤの北方)	23.5 露里
ヌプリノ (Nupurino, Нупурино)	(マヌヤの北方)	18.5 露里

(64) どこを起点にして何露里なのか、原文では記載されていない。しかし、65の原注にもあるように、マヌヤを起点にした距離が書かれていると推測できる。よって、タライカは、「マヌヤの北方173露里」ということであろう。原文では、タライカからオガコタンまで「マヌヤの北方」とは記載されておらず、オガコタンのみ「マヌヤの北方」と記載されている。原文には書かれておらず、訳者が追加記載した部分には、( ) を付けている。なお、1露里は1.067 km。

(65) 原注：方角は、明らかに、北方である。なぜなら、マヌヤより南方の村落は以下に数えられているからである。

ネトウシ (Nyetusi, Негуси)	(マヌヤの北方)	11 露里
チカネロフナイ (Chikanerokhnaĭ, Чиканерохнай)	(マヌヤの北方)	9.5 露里
オチャセナイ (Ochasenaj, Очасенай)	(マヌヤの北方)	7 露里
チトゥカンチスイ (Chitukanchis', Читуканчись)	(マヌヤの北方)	2.5 露里
ヴァリ (Vari, Вари)	(マヌヤの北方)	2 露里
オガコタン (Ogakotan, Огакотанъ)	マヌヤの北方	1 露里
マヌヤ (Manuya, Мануя) (北緯 47 度 54 分 51 秒)		
シララカ (Siraraka, Сирарака)	マヌヤの南方	6 露里
トゥーペケリ (Tu-pekeri, Ту-пекери)	(マヌヤの南方)	13.5 露里
パスイカラ-コタン (Pas'kara-kotan, Паськара-котаъ)	(マヌヤの南方)	17.5 露里
ポロナイ (Poronaj, Поронай)	(マヌヤの南方)	20 露里
マトマナイ (Matomanaj, Матоманай)	(マヌヤの南方)	26 露里
チェプフナイ (Cherukhnaĭ, Чепухнай)	(マヌヤの南方)	31.5 露里
セレモコナイ (Seremokonaĭ, Серемоконай)	(マヌヤの南方)	32.25 露里
オトサン (Otosan, Отосанъ)	(マヌヤの南方)	33 露里
シルトゥル (Siruturu, Сирутuru)	(マヌヤの南方)	43 露里
オソントウキナイ (Osontukinaĭ, Осонтукинай)	(マヌヤの南方)	47.75 露里
アイ (Aj, Ай)	(マヌヤの南方)	49.75 露里
ナイブチ (Najbuchi, Найбучи) 川	(マヌヤの南方)	57.75 露里
ナイブチ哨所	(マヌヤの南方)	59.75 露里
スマヤ (Sumaya, Сумая)	(マヌヤの南方)	63.75 露里
ススフナイ (Susukhnaĭ, Сусухнай)	(マヌヤの南方)	64.75 露里
サフサツイ (Sakhsatsi, Сахсацц)	(マヌヤの南方)	71.25 露里
トゥレイ (Turej, Турей)	(マヌヤの南方)	72.5 露里
ノフサム (Nokhsam, Нохсамъ)	(マヌヤの南方)	88 露里
イヌヌフナイ (Inunukhnaĭ, Инунухнай)	(マヌヤの南方)	92 露里
ノトロ (Notoro, Ноторо)	(マヌヤの南方)	99.5 露里
スマオ-コタン (Sumao-kotan, Сумао-котаъ)	(マヌヤの南方)	102 露里
オブッサキ (Obussaki, Обуссаки)	(マヌヤの南方)	109 露里
コヌスペ (Konuspe, Конуспе)	(マヌヤの南方)	112 露里
ヴェン-コタン (Ven-kotan, Вень-котаъ)	(マヌヤの南方)	116.5 露里
ノソオイ (Nosooj, Носоой)	(マヌヤの南方)	121.5 露里
オチェフポコ (Ochevroko, Очевпоко)	(マヌヤの南方)	124 露里
トゥナイチャ (Tunajcha, Тунайча)	(マヌヤの南方)	130 露里
ヴェネントゥルム (Venentrum, Венентрумъ)	マヌヤの南方	131 露里
アイル (Ajru, Айру)	(マヌヤの南方)	153 露里
トニン (Tonin, Тонинъ)	(マヌヤの南方)	157.5 露里



メナプフ (Menapuf, Менапуфъ)	(マヌヤの南方)	210.75 露里
ハスイポ (Khas'po, Хасъпо)	(マヌヤの南方)	230 露里
シャフトプ (Syakhtoru, Сяхтопу)	(マヌヤの南方)	231.5 露里
シャフトプ川	(マヌヤの南方)	233 露里
シレトコ (Siretoko, Сиретоко)	マヌヤの南方	253 露里
	カルサコフの東方	98 露里
チカピナウシ (Chikapinausi, Чикапинауси)	カルサコフの東方	75 露里
オマンベ (Omappe, Омампе)	(カルサコフの東方)	74 露里
ナイクトゥル (Najkuturu, Найкутуру)	(カルサコフの東方)	69 露里
ツイスネイ (Tsisnej, Цисней)	(カルサコフの東方)	61.25 露里
ヤヴァンペ (Yavampe, Явампе)	(カルサコフの東方)	60.5 露里
ツイスネイ (Tsisnej, Цисней)	(カルサコフの東方)	57.5 露里
イノスキターアンナイ (Inoskita-an-naj, Иноскита-анъ-най)	(カルサコフの東方)	56 露里
ナイ・オ・ナイ (Naj o naj, Най о най)	(カルサコフの東方)	53 露里
コチヨベ (Kochobe, Кочобе)	(カルサコフの東方)	50 露里
トブチ (Tobuchi, Тобучи)	(カルサコフの東方)	45.5 露里
イオクシ (Yokusi, Йокуси)	(カルサコフの東方)	44.5 露里
ナイトム (Najtom, Найтомъ)	(カルサコフの東方)	40.5 露里
ヌフツイコエ (Nuftsikoye, Нуфцикое)	(カルサコフの東方)	38.5 露里
ゴラフプニ (Gorakhpuni, Горахпуни)	(カルサコフの東方)	33 露里
チェピサニ (Cherisani, Чеписани)	(カルサコフの東方)	29 露里
オタニ・エンドウマ (Otani enduma, Отани эндума)	(カルサコフの東方)	27.5 露里
イノスコマナイ (Inoskomahaj, Иноскоманай)	(カルサコフの東方)	21 露里
オテニチニガ (Oten'tin'ga, Отэньтиньга)	(カルサコフの東方)	19 露里
ソヤ (Soya, Соя)	(カルサコフの東方)	15 露里
オタサン (Otasani, Отасанъ)	(カルサコフの東方)	12 露里
ユトゥフタンナイ (Yutuftannaaj, Ютуфтаннай)	(カルサコフの東方)	11.5 露里
ゴクイコタン (Gokuj-kotah, Гокуй-котанъ)	(カルサコフの東方)	8.25 露里
エントゥルムガ (Entrumga, Энтрумга)	(カルサコフの東方)	4.25 露里
ポロアン・トマリ (Poroan Tomari, Пороанъ Томари)	(カルサコフの東方)	2.5 露里
クスンコタン (Kusun-kotah, Кусунъ-котанъ)	(カルサコフの東方)	0.5 露里
カルサコフ (Karsakov, Карсаковъ) (ガフカトマリ (Gakhka-tomari, Гахка-томари))		
ウントゥラ (Untra, Унтра)	カルサコフの西方	2.5 露里
ウソソナイ (Usonnaj, Усоннай)	(カルサコフの西方)	3.5 露里
トマリオンナイ (Tomarionnaj, Томарионнай)	(カルサコフの西方)	5 露里
チナイプ (Chinajpu, Чинайпу)	カルサコフの西方	6 露里
ススヤ (Susuya, Сусуя)	(カルサコフの西方)	7 露里

ススヤ川	(カルサコフの西方)	10 露里
ケケ (Keke, Кеке)	(カルサコフの西方)	12 露里
トゥイ (Tuj, Туї)	(カルサコフの西方)	13 露里
トゥヤ (Tuя, Туя)	(カルサコフの西方)	23 露里
トゥルオタガ (Truotaga, Труотага)	(カルサコフの西方)	28 露里
トゥリラ (Trira, Трира)	(カルサコフの西方)	34.5 露里
タマナイ (Tamanaj, Таманай)	(カルサコフの西方)	37.5 露里
ピフリナイ (Pifurinaj, Пифуринай)	(カルサコフの西方)	39.5 露里
ポロナイス (Poronajnu, Поронайну)	(カルサコフの西方)	46 露里
ウル (Uru, Уру)	(カルサコフの西方)	56 露里
ベストゥル (Pyesuturu, Песутуру)	(カルサコフの西方)	67 露里
トマリオンナイ (Tomarionnaj, Томаріоннай)	(カルサコフの西方)	75.5 露里
ムナイ (Munaj, Мунай)	(カルサコフの西方)	76.75 露里
クルフ (Kurukh, Курухъ)	(カルサコフの西方)	80.75 露里
リア・トマリ (Ria Tomari, Ріа Томари)	(カルサコフの西方)	87.75 露里
ナイチャ (Najcha, Найча)	(カルサコフの西方)	91.75 露里
モゴツイ (Mogotsi, Могоци)	(カルサコフの西方)	98.25 露里
ヴェンノチ (Vennochі, Венночи)	(カルサコフの西方)	101.75 露里
ベササム (Pesasam, Песасамъ)	(カルサコフの西方)	108.25 露里
ツィスイヤ (Tsis'ya, Цісья)	(カルサコフの西方)	111.75 露里
クリリオン (Kril'on, Крильонъ)	(カルサコフの西方)	139 露里
シラヌシ (Siranusi, Сірануси)	クスナイの南方	24 露里
オガコタン (Ogakotan, Огакотанъ)	(クスナイの南方)	238 露里
シラヌシ (Siranusi, Сірануси)	(クスナイの南方)	235.5 露里
ベストマナイ (Pestomanaj, Пестоманай)	(クスナイの南方)	227 露里
ソニ (Soni, Сони)	(クスナイの南方)	219 露里
ソピ (Sopi, Сопи)	(クスナイの南方)	217.5 露里
ヴィンツィスイ (Vintsis', Винцись)	(クスナイの南方)	211.5 露里
ウスグ モライブ (Usugu molajbu, Усугу молайбу)	(クスナイの南方)	209 露里
ルークセナイ (Ru-kusenaj, Ру-кусэнай)	(クスナイの南方)	206.5 露里
アフトゥリ トナイ (Akhturi tonaj, Ахтури тонай)	(クスナイの南方)	204.5 露里
カルバスモナイ (Karbasumonaj, Карбасумонай)	(クスナイの南方)	201.5 露里
トゥムナイ (Tumunaj, Тумунай)	(クスナイの南方)	199 露里
オネヌスナイ (Onenusunaj, Оненусунай)	(クスナイの南方)	197 露里
ムヌ・スナイ (Munu sunaj, Муну сунай)	(クスナイの南方)	194 露里
オドゥ・オットナイ (Odu ottonaj, Оду оттонай)	(クスナイの南方)	191.25 露里
ヤロオモナイ (Yaroomonaj, Яроомонай)	(クスナイの南方)	187.25 露里

キストエナイ (Kistoyenaj, Кистоенай)	(クスナイの南方)	183.75 露里
モイリ・トマリ (Moјri tomarі, Мойри томари)	(クスナイの南方)	180.75 露里
ナヤシ (Nayasi, Наяси)	クスナイの南方	178.75 露里
ルインナイ (Rynnaj, Рыннай)	(クスナイの南方)	166.25 露里
ナイブ・ウトウル (Najbu uturu, Найбу утуру)	(クスナイの南方)	165.25 露里
トコンボ (Tokombo, Токомбо) <sup>(66)</sup>	(クスナイの南方)	161.25 露里
ウスニガル (Usnigaru, Уснигару)	(クスナイの南方)	159.5 露里
オルトフトナイ (Orutokhtonaj, Орутохтонай)	(クスナイの南方)	158.5 露里
トコンボ (Tokombo, Токомбо) <sup>(67)</sup>	(クスナイの南方)	153.5 露里
トゥブシ (Tubusi, тубуси)	(クスナイの南方)	147 露里
オコ (Oko, Око)	(クスナイの南方)	142 露里
アッサナイ (Assanaj, Ассанай)	(クスナイの南方)	137.5 露里
タラン・トマリ (Taran tomarі, Таранъ томари)	(クスナイの南方)	129 露里
ホットマリ (Khottomari, Хоттомари)	(クスナイの南方)	124 露里
ピロフ (Pirokh, Пирохъ)	(クスナイの南方)	119 露里
オキブシ (Okibusi, Окибуси)	(クスナイの南方)	115.5 露里
ナイブ・ウトウル (Najbu uturu, Найбу утуру)	(クスナイの南方)	112.5 露里
トゥイ (Tuj, Туй)	(クスナイの南方)	111 露里
トゥナイ (Tunaj, Тунай) (エンドウゴモ (Endungomo, Эндунгомо)) (マウカ (Mauka, Маука))	(クスナイの南方)	107 露里
アラクイ (Arakuj, Аракуй)	(クスナイの南方)	105.5 露里
ポロ・トマリ (Poro tomarі, Поро томари)	(クスナイの南方)	101 露里
ハツコ・ブッセ (Khatsko Busse, Хацко Буссе)	(クスナイの南方)	99.5 露里
トラフマナ (Trakhmana, Трахмана) (ラクヌモ (Rak-Numo, Ракъ-Нумо))	(クスナイの南方)	97.5 露里
トマリ-ポ (Tomari-Po, Томари-По)	(クスナイの南方)	95.5 露里
トゥンナクス (Tunnaks, Туннакъ)	(クスナイの南方)	94 露里
トゥ・コタン (Tu kotan, Ту котанъ)	(クスナイの南方)	92 露里
アブマイ (Abumaj, Абумай)	(クスナイの南方)	84 露里
ノトロ (Notoro, Ногоро)	(クスナイの南方)	77 露里
トゥブト (Tubut, Тубуть)	(クスナイの南方)	67 露里
ノタフサム (Notakhsam, Нотаксамъ)	(クスナイの南方)	63 露里
パイカ・サブシ (Pajka sabusi, Пайка сабуси)	(クスナイの南方)	61 露里
トゥムマカイ (Tummakaj, Туммакай)	(クスナイの南方)	53 露里

(66) 注 66 と同名の村。

(67) 注 65 と同名の村。

アラコイ (Arakoj, Аракой)	(クスナイの南方)	50 露里
チカイ・ナイプ (Chikaj najpu, Чикай найпу)	(クスナイの南方)	46 露里
ウッス (Ussu, Уссу)	(クスナイの南方)	43 露里
オテフコロ (Otekhkoro, Отехкоро)	(クスナイの南方)	37.5 露里
ツィカイ (Tsikaj, Цикай)	(クスナイの南方)	35 露里
クムナイ (Kumunaj, Кумунай)	(クスナイの南方)	31 露里
トマリ (Tomari, Томари)	(クスナイの南方)	24.5 露里
トマリ-ノ (Tomari-no, Томари-но)	(クスナイの南方)	23 露里
チョマ・ナイプ (Choma najpu, Чома найбу)	(クスナイの南方)	19 露里
カラオフ・ナイプ (Karaokh najpu, Караох найбу)	(クスナイの南方)	17.25 露里
シラロロ (Siraroro, Сирароро)	(クスナイの南方)	16.5 露里
チライオフナイ (Chirajokhnaj, Чирайохнай)	クスナイの南方	15.5 露里
クトゥヌス・ナイプ (Kutunus najpu, Кутунусь найбу)	(クスナイの南方)	13.5 露里
ナヨロ (Najoro, Найоро)	(クスナイの南方)	8.5 露里
クスナイ (Kusunaj, Кусунай) (北緯 47 度 59 分 24 秒)		
コモシララボ (Komosirarabo, Комосирарабо)	クスナイの北方	3 露里
イトウニナイ (Ituninaj, Итунинай)	(クスナイの北方)	10 露里
オコノナイ (Okononaj, Окононай)	(クスナイの北方)	20 露里
エビシ (Ebisj, Эбиси)	(クスナイの北方)	30.5 露里
オタス (Otasu, Отасу)	(クスナイの北方)	36.5 露里
ライツィスイカ (Rajtsis'ka, Райциська)	(クスナイの北方)	46 露里
ストゥカンビス (Stukambis, Стукамбись)	(クスナイの北方)	85 露里
ヴェント-ヴェサン (Vent-vesan, Вентъ-весанъ) (あるいはウスリ (Usuri, Усури))	(クスナイの北方)	97 露里
ウッス (Ussu, Уссу)	(クスナイの北方)	98 露里
ウッス (Ussu, Уссу)	(クスナイの北方)	102 露里
フレオツツィ (Khreottsij, Хуреотци)	(クスナイの北方)	103.5 露里
ペスト (Pesto, Песто)	(クスナイの北方)	107 露里
オロケス (Orokes, Орокесь)	(クスナイの北方)	108.5 露里

## b) サハリン島両岸

Б=бухта「入り江」, М=мысь「岬」, Г=гора「山」, Р=рѣка「川」, Рк=рѣчка「小川」, Рч=ручей「小川, せせらぎ」, Ск=скала「岩, 断崖」, З=заливъ небольшой (губа)「大小くない湾」, Д=деревня「村」, Ю=юрта「ユルト(遊牧民族の移動式住居)」, Ср=сарай「物置, 小屋」, П=пустой「空の, 人が住んでいない」, Яп=Японскій「日本の」, Айн=Айновскій「アイヌの」,

Гй=Гиляцкій 「ギリヤークの」<sup>(68)</sup>

## A. 西 岸

アルカイ (Arukaj, Арукай) 村およびアルカイ川； ジョンキエル (Zhonk'yer, Жонкьеръ) 湾にある

ドゥイ (Duj, Дуй) 岬

チョインドゥシュ (Choindschu<sup>(69)</sup>) 入江； ドゥイとチョインドゥシュクテ (Choindschukte) の間にある

ドゥイ村 ドゥイ小川

チョインドゥシュクテ (Choindschukte) 岬

ペス・クテ (Pes-kte) 岬 〈クテ (kte, кте) は岬を意味する〉

カルスコ (Karsko) 岩

オッセイガ (Osseiga) 岬

チャブル (Tschabr) 岩 〈滝がある〉

ピラングテ (Pillangte) 岬

アドゥギ (Adugi) 川

アルバウスプ (Albausp) 岬

アドゥギ (Adugi) 村 〈ギリヤークの夏の村〉

エングダニフ (Engdanif) 岬

ポドゥロングクテ (Podlongkte) 岬 〈この岬とモイッセ (Moisse) 岬は、カストゥリ (Kastri, Кастри) 村とドゥーイ (Duj, Дуй) 村の間に見える。この2つの岬の間には、マルティニエル尖峰 (Pic de la Martinière) のあるマルティニエル入江 (бухта de la Martinière) がある。入江の長さは30露里である。〉

ドゥイ岬は、チョインドゥシュ (Choindschu) 入江とジョンクィエル湾 (залив de la Jonquière) を分ける。

キドゥセフクテ (Kidsächkte) 岬 〈大きな入江にあり、舟の停泊に適している〉

モイッセ (Moisse) 岬

モイッセ小川

ケドゥルス (Kedrus) 川

(68) 原文では、このような省略記号が用いられている。しかし、訳文で省略記号を用いると、かえって複雑な記述になるので、省略記号は使用しなかった。

(69) 原文において地名がラテン文字だけで書かれていることが多いが、その場合、その地名がロシア語やアイヌ語ではなく、ドイツ語、フランス語などを起源にしているということであろう。

ケドウルス岬

クタウシ (Ktausi) 川

クタウシ岬 〈ここからクタウシパル (Ktausipal) 山がはっきり見える。〉

クタウシ村 〈2軒のアイヌのユルタ〉

チョッコラン (Chokkoran) 村 〈3人のアイヌが暮らす1軒のユルタ〉

チャルトウル (Tschartr) 岬

ピレウォ (Pilewo) 村あるいはポロコタン (Porotokotan) 村 〈3軒のユルタ; モッシレ (Mossire) (「島」を意味する) という名の島がある入江にある。〉

ポロコタン川

アモビス (Amobis) 岬

ズィプヌネイ (Zipnunei) 小川

ポロトマリ (Porotomari) 入江

オイオナイ (Oionaj) 川

テタントゥイ (Tetantuj) 岬 〈海中に岩石がある〉

ソドゥコナイ (Sodkonai) 川

かつてあったソヤ (Soja) 村 〈廃村となった〉

アカッサナイ (Akassanai) 小川

トゥリビス (Tribis) 岬

オッタエンドウ (Ottaendu) 岬 〈岸にそって断崖がある〉

アロッコナイ (Arrokonai) 川

トゥナイ (Tunai) 岬

エンギンビス (Enginbis) 岬

サフコタン (Sachkotan) 川のある入江 〈サコタ (Sacota) ではなく〉

モナイ (Monai) 川

シネ・モナイ (Sine Monai) 川

チャイバリ (Chaibari) 岬

シロルトナイ (Siroronai) 川あるいはシロトフトナイ (Sirotochtonai) 川

ナヤッシ (Najassi) 川

ナヤッシ岬 〈長い〉

ノタッサム (Notassam) 石の多い長い岸<sup>(70)</sup>

モロロツイ (Mororotzi) 岬

モロロツイ川

---

(70) 原文では, Каменистый берегъ длинный Notassam。

ティオナイ (Tionai) 川

(モロツィ川とティオナイ川の間には Pic<sup>(71)</sup> がある。もしかしたら Monjez<sup>(72)</sup> de la Perouse か  
もしれない)

ティオナイ岬 〈水中に岩石がある〉

ペスポ (Pespo) 岬<sup>(73)</sup>

タウルス (Taurus) 長い断崖の岸

タヴロ (Tavro) とポロタヴロ (Porotavro) の二つの湖をもつ低地

ポロ・エンドウ (Poro Endu) 岬

エッシトゥル (Essitur) 川

トマリウクス (Tomariuks) 入江, 川, 岬

ペスポ岬<sup>(74)</sup>

ペスポ川

チャツコペスポ岬 (Chatzkopespo) 〈日本人<sup>(75)</sup>〉

ウィンビラ (Wimbira) 断崖

オロケス (Orokes) 川 〈時に人の住むユルタがある〉

ヌエンドウ (Nuendu) 岬

カプラス (Kabburas) 岬 〈その後ろに<sup>(76)</sup>; タウコタン (Taukotan) 「この場所」ではな  
く〉

デステイン (d'Estaing) 湾 〈アイヌ語でウッスル (Ussuru); ウロツィ (Urotzi), ウロ-ウッ  
ス (Uro-Ussu), ナイコトロ (Naikotoro), ウストモナイ (Ustomonai) およびウエンドウ・ウエ  
スサン (Wend-wessan) の各村がある〉

ウロツィ (Urotzi) 村 〈エヌントマリ (Enuntomari) という小さな入江にある〉

スマトマラス (Sumatomaranu) 岬

トゥッセオナ (Tusseona) 岬

ウロツィ (Urotzi) 川

エトゥ・エタニ (Etu enai) 岬

エタネ・ペスポ (Etane Pespo) 岬

---

(71) フランス語の Pic 「尖峰, ピーク」のことか。

(72) 不明。

(73) 注 74 と同名の岬。重複であろう。

(74) 注 73 と同名の岬。重複であろう。

(75) 「日本人が住んでいる」ということか。

(76) 原文では, позади ego である。позади は前置詞として用いられ, 「~の後ろに」の意味であろう。ego は, この場合, 3 人称男性の代名詞 он あるいは 3 人称中性 оно の生格であろう。しかし, 何を指しているのが不明である。

- チヨオ・ペスポ (Choo Pespo) 岬  
サマンビレ・エサ (Samambire esa) 岬  
エナウス・ペスポ (Enaus pespo) 岬  
セイッス (Seissu) 岬  
ウッス (Ussu) 村 〈この村の背後には, d' Estaing 湾がある〉  
テオス・ナイブ (Teos naibu) 小川  
トマン・ナイ (Toman nai) 小川  
トゥレア・ウッシ (Trea ussi) 岬  
コツェンネ・ナイブ (Kotzenne naipu) 小川  
ウストスキ (Ustoski) 岬  
トゥレチ・カヌッセ (Turech kannusse) 岬  
トゥレイコロ・オカ (Treikoro oka) 入江  
スケリオブ (Skeriobu) 尖峰  
オトレチ・カヌッセ (Otorech kanusse) 岬  
ナイコトロ (Naikotoro) 川  
ナイコトロ村 〈2 軒のユルタ〉  
トロコッサ (Torokossa) 岬  
マッセナウッシ (Massenaussi) 岬  
ウストモナイブ (Ustomonaipu) 村 〈日本人とアイヌ人の混住の村; ここには日本の船が停泊する。〉  
エナウッセン トウンボ (Enaussentumbo) 岬 〈入江の最後の岬〉  
ウエンドウウエッサン (Wendwessan) 村 〈5 軒のユルタ〉  
ペスポ (Pespo)<sup>(77)</sup> 岬  
ポロ・トマリ (Poro tomari) 入江  
オイオン-ペスポ (Oion-pespo) 岬  
チナイキ-ワッセ (Tschinaiki-wasse) 岬 〈水中に多くの岩石がある〉  
アザウリ・オキ (Azauri oki) 斜面  
オンネニオイ (Onnenioi) 岬  
モニオイ (Monioi) 鼻 (突出部)  
フンベオ・ナイブ (Humbeo naipu) 小川  
フンベオ・ナイブ岬  
ズィウイトウオナイ (Ziwituonai) 小川

---

(77) 注 73, 注 74 と同名の岬。重複であろう。



- エントコチ・ナイブ (Entokoch naibu) 小川  
アボッセンコ・モナイ (Abossenکو monai) 小川  
アラオトウコッシ (Araotukossi) 岬  
トゥッソチャラ (Tussotschara) 岬  
アリラムビ (Arirambi) 岬 〈岸の曲がり角〉  
エッサウスナイ (Essausnai) 小川  
ポトコマリ (Potokomari) 入江および岬  
イノスケトン・エンドウ (Inosketon endu) 岬  
ストウカンビス (Stukambis) 岬 〈イッチャラ (Itschara) 山あるいはラマノン (Lamanon) 山の麓にある。ここにスモチナイブ (Sumochinaibu) およびカロチャイブ (Karochaibu) の二つの小川がある。〉  
イッチャラ (Itschara) 川  
トゥケレウキ (Tukereuki) 岬  
コタンタル (Kotantaru) 川  
ツェフネノスナイ (Tshehnenosnai) 鼻 (突出部) と小川 〈猟師や旅人のためのユルタがある〉  
トゥライズィスカ (Traiziska) 湖の河口  
トゥライズィスカ村 河口にある  
オタッス (Otassu) ユルタ  
オタッス小川  
トゥクスナイ (Tukusnai) 小川  
エビッシ (Ebissi) 川 〈ユルタがある〉  
ノッサム (Nossam) 岬  
オコナイブ (Okonaibu) 川  
エトンナイ (Etonnai) 小川 〈湖とつながっている〉  
チュムボマナイブ (Chumbomanaipu) 小川  
ポロライブ (Pororaipu) 小川  
コムスレラブ (Komusrerapu) 村  
クスナイ (Kusunaj) 哨所 〈ロシアの哨所〉  
クスナイ川  
クッスナイ (Kussunai) 〈日本の哨所〉  
ナヨロ (Najoro) 村および川 〈5軒のユルタ； 各ユルタにほぼ2家族〉  
シラロロ (Siraroro) 村 〈2軒のユルタ； シラロチナイ (Sirarochnai) 河畔〉  
トマリオロナイ (Tomarioronai) 川 〈日本人の家屋がある〉  
トゥンモナイブ (Tummonaipu) 川 〈ユルタがある〉

- オテチコロ (Otechikoro) 川  
チカイ (Tschikai) 岬  
アラコイ (Arakoi) 岬  
パイカサブッシ (Paikasabussi) 岬 〈日本人の家がある〉  
ノトサマ (Notosama) 入江および村 〈日本人とアイヌの混住の村； 2つの川がある〉  
トゥブ (Tubu) 川 〈日本人の家屋がある〉  
ノトロ (Notoro) 半島, 岬および川  
小さな入江 (複数) 〈すべてに小川とユルタ, 日本人の倉庫があり, 大体は空き家： トウコタン (Tukotan), トマリプ (Tomaripu), トウラフマカ (Trachmaka), ハツココリッス (Hatzkokorissu), ポロトマリ (Porotomari) およびエンドウンゴモ (Endungomo) あるいはトゥナイ (Tunai) あるいはマウカ (Mauka)<sup>(78)</sup> (40軒のユルタ, 10軒の日本人の家屋, 倉庫がある)。その近くにトゥコタンヌボリ (Tukotan nubori) 山がある。それは, おそらく, ラベルス・ベルニゼ尖峰 (Pic Bernizet<sup>(79)</sup> de la Prouse) である。〉  
トゥ (Tu) 〈日本人の倉庫〉  
チトスナイブ (Tschitosnaibu) 小川 〈日本人の炭置き場がある〉  
アカブス (Akabus) 小川  
ピロ (Piró) 村および川  
オチャトマリ村  
タラントマリ (Ochatomari) 村 〈日本人の村〉  
アッサナイ (Assanai) 小川 〈日本人がいる〉  
オコ (Oko) 川および村  
トゥケイス (Tukeis) 川  
トコンボ (Tokombo) 村 〈日本人とアイヌの混住の村〉  
ウンドゥシコロナイ (Undsikoronai) 小川および日本人の家  
ナイボロ (Naiboro) 村および小川  
オンネナイ (Onnenai) 川  
アトゥア (Atua) 小川およびユルタ  
モイリトマリ (Moiritomari) 〈宿泊所〉  
ソッリ (Ssori) 〈宿泊所〉  
シッラヌッシ (Ssiranussi) 村 〈大きな村〉  
クリロン (Crillon) 岬

(78) エンドウンゴモ (Endungomo), トウナイ (Tunai), マウカ (Mauka) は, 同一の土地の名である。

(79) 不明。

## B. 東 岸

- トゥンナイッチャ (Tunnaittscha) 村 〈日本人とアイヌの混住の村〉
- オツチェフポコ (Otschechpoko) 村
- ウェンコタン (Wenkotan) 村
- オブッサキ (Opussaki) 村
- スマオコタン (Sumaokotan) 村
- エヌスナイ (Enusnai) 村
- スッススナイ (Sussusnai) 村
- ナイブツイ (Naibutzi) 村
- アイ (Ai) 村
- オタッサム (Otassam) 村
- マトゥモナイ (Matumonai) 村
- ポロナイ (Poronai) 村および川
- シラロロ (Siraroro) 村
- ワリ (Wari) 〈日本の哨所〉
- マヌエ (Manue) 〈ロシアの哨所〉
- チカペロフナイ (Tschikaperochnai) 村
- トゥッス (Tussu) 岬
- ラルベッシスコ (Rarupessisko) 山
- トゥカレウキ (Tukareuki) 断崖
- 魚を干すための日本の建物
- モグンコタン (Mogunkotan) 村 〈日本人とアイヌの混住の村； 停泊に適す。〉
- テルニカポ (Ternikapo) 岬までの入江
- エンドゥムマト (Endummato) 岬までの入江
- マツトゥナイ (Mattunai) 川 〈掘立て小屋がある〉
- ピエドゥ (Piedu) 岬
- ネオナイ (Neonai) 岬までの入江 〈この入江にはフィリアザラシ (Seehund) 獲りのための村がある； モロマリ (Moromari) 村, ウリ (Uri) 村およびフンバ (Hunba) 村
- ポンナイ (Ponnai)
- ウリ (Uri) 村 〈日本人の村〉
- ネオナイ (Neonai) 岬
- カスピ (Kaspi) あるいはカस्पツイ (Kasputzi) 川
- カスピ村 〈この村の近くにはゼキシェラング (Zekischerang) 山がある〉

ヌプカ (Nupka) (ノフカ (Nochka)) 山, ヌブリ (Nuburi) 「大きな白い山」

ウエンコタン (Wenkotan) 村 〈1軒のユルタ〉

ピツソキス (Pissokis) 山 〈ウエンコタン村の背後, しかし, それはどこに?〉

クツクンゴ (Kutzkungo) 山 〈ウエンコタン村の背後, しかし, それはどこに?〉

シルトゥル (Siruturu) 川

イマウスナイ (Imausunai) 川

サフコタン (Sachkotan) 川および岬

コタントウル (Kotanturu) 川および岬

オヌフコタイ (Onuchikotai) 岬

シヌッシ (Sinussi) 岬

ニトウイ (Nitui) 川

ノテトゥ (Notetu) 岬

コタンキス (Kotankis) 川および村

ナヨロ (Najoro) 川および村

オロッコの村およびシスカ川

} 完全なリストではない

オロッコのタランコタン (Tarankotan) 村

タライカ村 (アイヌの村) 〈タライカ (Taraika) 湖の河口にある。この先には, アイヌはいない。〉

サハリン西岸の北から南へのギリヤークの村 (グレン (Glyen, Глен) による)

村の名	ユルタの数	備考
コイブイグル-ヴォ (Kojbygr-vo, Койбыгръ-во) あるいは コイブグドゥ-ヴォ (Kojbugd-vo, Койбугрдь-во <sup>(80)</sup> )	1	クルゼンシュテルン (Kruzenshtern, Крузенштерн) H) によれば, 以前は 30 軒。
ヌゲドゥ (Ngöd, Нгöд <sup>(81)</sup> ), ヌグイドゥ (Ngyd, Нгыд), さらに ヌグイル (Ngur, Нгыр)	3	土小屋
マトゥナル (Matnar, Матнаръ)	1	土小屋
トゥミ (Tumi, Туми)	1	土小屋
ピル-ヴォ (Pil-vo, Пилъ-во) (Pilal'ch は「大きい」を意味する)	1	土小屋
トゥイク (Tuk, Тыкъ) (他の村の夏のユルタ)	1	土小屋

(80) 原注 村を意味する vo は, y (u) と v (v) の中間の音で発音され, 時に o (o) のようにも発音される。d (d) と p (r) は, しばしば置き換えられ, たとえば, ади-ла (adi-la) とも ари-ла (ari-la) 「北風」とも言われる。多くの場所では, 人口が稠密だった痕跡が発見できる。島の北部に住むギリヤーク人たちが語るように, この 10 年の間に天然痘によって引き起こされた荒廃によって, サハリンの村の人口が著しく減少した。Pil-vo を参照。

(81) Нгöд の ö の文字はロシア語で用いるキリル文字にはないが, ここでは, ドイツ語の ö に近い音を表そうとしているのだろう。

ムイズヴ (Muiz'v, Муизъвъ)	2	土小屋
ポムイト (Pomut, Помытъ) あるいはポマイル (Pomur, Помыръ)	3	満州人が建てた大きなユルタ
ヌグイル-ヴォ (Ngyl-vo, Нгылъ-во)	1	満州人が建てた大きなユルタ
ヴィスク-ヴォ (Visk-vo, Вискъ-во)	5	満州人が建てた大きなユルタ
タムラ-ヴォ (Tamlra-vo, Тамла-во) あるいはヌガル-ヴォ (Ngal-vo, Нгалъ-во) 〈Tamlan'ch は「多数の」を意味する〉	9	満州人が建てた大きなユルタ
マトゥン-ティグドゥ-ヴォ (Matn-tigd-vo, Матн-тигдъ-во) 〈ベトゥンブク (Puetnbubuk, Петунбубук)〉	2	満州人が建てた大きなユルタ
テルチグル-ヴォ (Töltigr-vo, Тöлтигръ-во) 〈テルンチグドゥ- ヴォ (Töln-tigd-vo, Тöлтигдъ-во) : ムンズ (Munz, Мунзъ)〉	2	満州人が建てた大きなユルタ
ニヤニ-ヴォ (Nyān'-vo, Ньянь-во) 〈ウインストウイフ (Ujnstykh, Уйнстыхъ), ウンドゥガトゥ (Undgat, Ундгатъ), ヒム-ヴォ (Khim-vo, Химъ-во), オレグ-ヴォ (Oleg-vo, Олегъ- во), ユグチエフ (Yugutiyeu, Югүтиев)〉	3	満州人が建てた大きなユルタ
マンガル-ヴォ (Mangal-vo, Мангалъ-во) 〈ラングリ (Langri, Лангри)〉	1	満州人が建てた大きなユルタ
イオルヂ-チグル-ヴォ (Iordi-tigr-vo, Иорди-тигръ-во) 〈「乾いた」の反対の「湿った」〉	2	満州人が建てた大きなユルタ
タンヴァントゥ-チグル-ヴォ (Tanvant-tigr-vo, Танвантъ- тигръ-во) あるいはタルバントゥ-チグドゥ-ヴォ (Talvant- tigr-vo, Талвант-тигд-во) 〈ルク-ヴォ (Luk-vo, Лукъ-во)〉	1	土小屋
チャングニ (Changni, Чангни) 〈様々に発音される〉	1	土小屋
ルイルキ (Ryrki, Рурки)	1	土小屋
ヂンギ (Dzhangi, Джинги), チンギ (Chingi, Чинги), イイグ ダム (Iigdam, Иигдамъ), イイグラム (Iigram, Ииграмъ)	1	土小屋
ロクシ (Loksi, Локси), ヌノクシ (Nnoksi, Ннокси)	1	土小屋
ヌグイドゥ (Ngujd, Нгуйдъ), ヌイドゥ (Nujd, Нуйдъ)	2	土小屋
ウアス (Uas, Уасъ), ヴアス (Vas, Васъ) あるいはウアヘス (Uakhyes, Уахесъ), ヴアヘス (Vakhyes, Вахесъ) 〈ヴォスメリエフ (Vosmeriyeu, Восмериевъ)〉	1	土小屋
ポゴビ (Pogobi, Погоби)	2	満州人が建てた大きなユルタ
トゥイク (Tuk, Тыкъ)	2-3	半地下式の土小屋
ヴィヤフトゥ (Viyakhtu, Вияхту)	2	半地下式の土小屋
ホイ (Khoj, Хой)	2	半地下式の土小屋
タンギ (Tangi, Танги)	3	半地下式の土小屋
ムイグナイ (Mugnaj, Мыгнай)	1	半地下式の土小屋
ニヤルミ (Niyarmi, Ниярми) 〈2軒の夏のユルタ, その所有者は二人を除いてホイで暮らし, 全員が天然痘で死に絶えた〉		半地下式の土小屋
アルカイ-ヴォ (Arkaj-vo, Аркай-во)	2-3	半地下式の土小屋
ドゥイ-ヴォ (Duj-vo, Дуй-во) 〈アドゥンギ (Adngi, Аднги)〉	2	半地下式の土小屋

サハリン東岸沿いの北から南への村

村の名	ユルタの数
ハイケス (Khaikes, Хаикесъ)	1
ヌゲドゥ (Ngôd, Нг о одъ)	1

ウルドゥクトゥ (Urdkt, Урдктъ)	1
ケエクル-ヴォ (Keäkr-vo, Ке ä крь-во)	3
ハルクル-ヴォ (Kharkr-vo, Харкръ-во) ハルカドゥ-ヴォ (Kharkad-vo, Харкадъ-во)	?
チャイ-ヴォ (Chaj-vo, Чай-во)	10
ラドゥ-ヴォ (Lad-vo, Ладъ-во)	3
トゥイルムイツ (Turmyts, Тырмыць)	?
トゥクル-ヌイ (Tukr-Nuj, Тукръ-Ный) <トゥイミ川河口>	7
タクル-ヌイ (Takar-Nuj, Такръ-Ный) <トゥイミ川河口>	9
ミヤク-ヴォ (Miyak-vo, М i якъ-во)	?
ヌガビル (Ngabil, Нгабиль)	3
ル-ヴォ (Lu-vo, Лу-во) <ギルヤークの大きな村>	?
ピルンギ (Pilngi, Пилнги)	?
ナピ (Napi, Напи)	?
チャムグ-ヴォ (Chamg-vo, Чамг-во)	?

プレイ (Plyj, Пльй) 川およびトゥイミ (Tumi, Тыми) 川沿いの地域

プレイ (Plyj, Пльй) 川沿い

村の名	ユルタの数
シスカ (Siska, Сиска) <オリチ (Ol'chi, Ольчи) <sup>(82)</sup> に属する> <タライカ (Tarajka, Тарайка) の夏のユルタ>	
フイ-エ (Khuje, Хуй-э)	2 (オリチの)
ムイカ (Mujka, Муйка)	1 (オリチの)

トゥイミ (Tumi, Тыми) 川沿い

トゥイミ (Tumi, Тыми) <sel? (сел?)<sup>(83)</sup> Бр.<sup>(84)</sup>>

チヤク-ヴォ (Chiyak-vo, Чиякъ-во)

タフィス-ヴォ (Tafis-vo, Тафисъ-во)

イトウキム (Itkim, Иткимъ)

(82) ウリチ (Ul'chi, Ульчи) と呼ばれることもある。ツングース系民族。

(83) 不明。疑問符は原文のまま。

(84) ブリルキンのことか。

河口にあるニイイ (Nii, Ний)<sup>(85)</sup>

### 3. アイヌの人口

1. 機械測量 (1866年と1867年)の際、地形測量技師のヨシフ・ヴィケンチエヴィッチ・パヴロヴィッチ (Iosif Vikent'yevich Pavlovich, Иосифъ Викентьевичъ Павловичъ) とザハル・マカロヴィチ・ベールキン (Zakhar Makarovich Belkih, Захаръ Макаровичъ Бѣлкин) は、サハリン島でアイヌのユルタと日本人の物置小屋の数を算出した (日本人の住宅と物置とを区別せず)。彼らの計算では、次のようになった (概算にすぎないと見る必要がある)。

	アイヌのユルタ	日本人の家屋
サハリン東岸 〈タライカ (Tarajka, Тарайка) からアニヴァ (Aniva, Анива) まで〉	136	60
サハリン南岸 〈アニワからクリリオン (Kri'lon, Крильон) まで〉	175	89
サハリン西岸 〈クリリオンからウスリ (Usuri, Усури) に近いオロケス (Orokyes, Орокесь) 川まで〉	187	67
合計	498	216

この数字には、ナイブチ (Найбучи, Найбучи) 川沿いやその支流沿いであって、ウスリから北方にある村は入っていない。それぞれのユルタに6人ずつの住人がいると考えると、サハリン島のアイヌの総数は3000人ほどになる。このことは、個人的に私に伝えられたのだが、通訳のジヤチコフ (D'yachkov, Дьячков) の算定に完全に一致する。村落は、パヴロヴィッチとベールキンの算定では、130である。したがって、一つの村落にあるユルタの平均の数は3.8である。日本人の村落は78と数えられ、一つの村落にある日本人の家屋の平均の数は2.8である。日本人から集められた情報によると、以下の数のアイヌが登録されている。クスン-コタン (Kusun-kotan, Кусун-котан) には男女合わせて1272人、リア-トマリ (Ria-tomari, Риа-томери) とシラスシ (Siranusi, Сирануси) には34人、エンドウゴモ (Endungomo, Эндунгомo) には837人、クスナイ (Kusunaj, Кусунай) には68人、ウスリには152人、トゥナイチャ (Tunajcha, Тунайча)


(85) (編者注) このあと著者のメモが続く。「すでに地理学辞典に書かれているギリヤークの語とともに、両方の表を語彙集に書き写す」。私がaと6の両方の表を出版したということもあるので、すべての語が『アイヌ語・ロシア語辞典』のなかに入っているわけではない。M.M.

(訳者注) 上記の表aと6がどのようなものか不明。また、前半部だけに引用符があるのかも不明。

には 153 人, サガイ-バマ (Sagaj-bama, Сагай-бама) 〈スススナイ (Sususnaj, Сусуснай)〉とアイ (Aj, Ай) には 246 人, ヴァリ (Vari, Вари) とマクン-コタン (Makun-kotan, Макунь-котан) には 54 人, 合計すると, 男女合わせて 2816 人であった。

この数には, テルペニエ (Terpeniye, Терпение) 湾沿いおよびウスリの北方に住むアイヌは, 日本人から独立した者として, 加えられていなかった (私がいた頃では, 日本人が彼らを強制的に働かせていることもあったが)。サハリン島の日本人は 1868 年には 216 の建物に 262 人がいた。つまり, 建物の大多数は人が住まない物置小屋 (納屋) であった。

## 4. アイヌの宗教, 哲学, 詩歌

1. サルンタラ (Saruntara, Сарунтара)<sup>(86)</sup> は, シトリ (Sitóri, Ситóри)<sup>(87)</sup>, オンネヴ (Onnev, Онневь)<sup>(88)</sup>, カンポロ (Kamporo, Кампоро)<sup>(89)</sup> を神と崇めている。熊とキツネを飼育している。
2. チュヴカ-ウンタラ (Chuvka-untara, Чувка-унтара)<sup>(90)</sup> は, ウライ・キニゲ (Uraj kinigè, Урай кинигè)<sup>(91)</sup>  によって, 殺されるべき者の首を締めつけ, この道具で窒息させる。犠牲となるのは身内およびよそ者, とくに病人および敵である。
3. 私がサハリン島にいた頃のシャーマン達。
  1. ハウオルスイ (Khaorús', Хауорúсь): チナイボ (Chinájbo, Чинайбо) 村のシャーマン。
  2. オゴリ (Ogóri, Огóри) あるいはスペツィヴ (Spétsiv, Специвь): 偉大なるウスリ (Usuri, Усури) のシャーマン。
  3. ヒ-イヒ (Khi-ikhi, Хи-ихи): チェプフナイ (Cherukhnaj, Чепухнай) のシャーマン。
  4. ペプトウ (Réputu, П é путу): シアンチン (Sianchin, Сианчин) のシャーマン
  5. ヘロッキ-エク (Kherókki-ekù, Херóкки-экү): トウナイチア (Tunajcha, Тунайча) のシャーマンのウイルケ (Újruke, Уйруке) の前任者
  6. ウイルケ (Újruke, Уйруке): トウナイチアのシャーマン。

(86) 本辞典 p.285, 6374 番目の語として掲載されている。マツマイ島の西側の住人 (アイヌ)。

(87) 本辞典 p.303, 6794 番目の語として掲載されている。「長い嘴を持つ大きな鳥; コウノトリ? (一口でイワシを1匹ずつ丸呑みする)」の意。

(88) 本辞典 p.226, 5071 番目の語として掲載されている。「驚」の意。

(89) 本辞典 p.115, 2531 番目の語として掲載されている。「ハシボンガラス」の意。

(90) 本辞典 p.427, 9629 番目の語として掲載されている。マツマイ島の東側の住人 (アイヌ)。

(91) 絵に描かれているもの, おそらく首を絞めるための道具のことであろう。



7. シリブシスイ (Siribusis', Сирибусисъ) : クスンコタン (Kusunkotan, Кусункотан) のシャーマン。
  8. カンベトウイエ (Kambetuujè, Камбетуйё) : スススナイ (Sususnaj, Сусуснай) のシャーマン。
  9. パグン (Pagùn, Пагунъ) : スマヤ (Sumayà, Сумая) 村のシャーマン。
  10. コフコ (Kókhko, Кóхко) : ナイブチ (Najbuchì, Найбучи) のシャーマン。
- 
4. シャーマニズムはアイヌではふつう世襲される。チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) は、夜私のところでシャーマンの儀式を学んだ。シャーマン達の間には、種族の反目や陰謀がある。
  5. (一人の) 死者から2人のアイヌが同じ名前を取ることはない。このため、村にはそれぞれ名前を取る村がある。例えば、チェプフナイ (Cherukhnaj, Чепухнай) のアイヌはクスン-コタン (Kusun-Kotan, Кусунъ-Котан), ススヤ (Susuya, Сусуя), ポロアントマリ (Poroantomari, Попоантомари) から名前を取る。
  6. 飼いキツネが殺されるとき、小さな祭りが行われる。サハリン島のアイヌは以前ワシを飼っていた。成長すると、その尾をむしりとして、日本人に売っていた。1つの尾に対して米2俵で。しかし、今は、日本人はこの尾を買わない。だから、アイヌはワシを飼っていない。
  7. チョグエク (Chóguyeku, Чóгуйеку)<sup>(92)</sup> は神として崇拝されている。オコム (Okòm, Okòmъ)<sup>(93)</sup> も崇拝され、航海の安全のために海のイナウ (inau, инау) が供物として投げられる。
  8. テキ-ケウナ (Téki-kéuna, Тэки-кэуна)<sup>(94)</sup> は、イポエ (Ipóye, Ипóе)<sup>(95)</sup> がニシン (その卵ではなく) を貪り食べるのに気付いたので、チョグエクのところへ行行って、このことを言うと、チョグエクは、そのことで、イポエを殺しに行く。
  9. ポロニ (poróni, порóни) 「アイヌの棺」は、ソコム-イタ (sokom-ità, сокомъ-итà) 「両側の脇板」、エトウフス (etúvsu, этúвсу) 「頭部と足元の板」、イヌンビタ (inúmbita, инúмбита) 「ふ

(92) 本辞典 p.425, 9593 番目の語として掲載されている。「シャチ、ネズミルカ(クジラのような髭がない)」の意。

(93) 本辞典 p.222, 4974 番目の語として掲載されている。「黒色のクジラ (あまり大きくない)」の意。

(94) 本辞典 p.356, 7988 番目の語として掲載されている。「胸に乳首のあるクジラ (海牛)」の意。

(95) 本辞典 p.92, 1971 番目の語として掲載されている。「ニシンとともにやって来る、太っていないクジラ」の意。

- た」から成り立っている。底はなく、墓穴そのものの中につくられる。
10. トゥシリ-イナウ (Túsiri-ináu, Тўсири-инáу) あるいはシヌラフパ-イナウ (Sinurákhpa-ináu, Синурáхпа-инáу) 「墓地のイナウ」は、神ではなく死者自身に捧げられる。そのイナウのことは、すでに神々に伝えられている。墓掘り人夫はアイヌのところにはいない。ガリヤジン (Garyazin, Гарязин) は、墓掘りをしたことで犬と呼ばれていた。彼の考えでは、自分を殺したいと思っている人がいるか、少なくとも、こっそり監視されているかのどちらかだった。
11. 魂は肉体とともに墓には行かないで、イヴァスイ (Ivásuǰ, Ивáсуǰ) と呼ばれる森の中の穴を通してポフナ-シリ (Pokhna-Siri, Похна-Сири) あるいはポフナ-コタン (Pokhna-kotan, Похна-котанъ) へ行く。こちらが冬のときは、ポフナ-シリでは真逆の夏である。ポフナ-シリにはコタン-カラベ (Kotan-kaǰarè, Котанъ-каǰарè) と呼ばれる創造神だけが住んでいる。
12. 森の動物は山の神の供物として捧げられる。鳥の頭は海の神に捧げられる。
13. カムイ-エウチャカスイノ (Kamùj-euchákas'no, Камўй-əučáкас'но) 「信仰についての教え」。アイヌの子供は、5歳あるいは10歳まで神に祈ることはないが、それ以後は、老人たちがさまざまな神々に祈ることを教え始める。
14. サニナウシ (Sanináusi, Санинáуси) 「海岸のイナウ置き場」は、キペリ (Kíperi, Кíпери) あるいはマサラ (Másara, Мáсара) に置かれている。このイナウは海の神に捧げられる。
15. 熊祭り (11月の満月時) の際のアイヌの歌は、3人の娘によって歌われる「カムイ-アシニキ (Kamùj-asín'ki, Камўй-аси́ньки) またはカムイ-オマンテ (Kamùj-ománte, Камўй-омáнтə)」である。

1. Uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nu,  
Uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nuva<sup>ˉ</sup>nu,  
Uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>urva<sup>ˉ</sup>nu,  
Uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nyrva<sup>ˉ</sup>nu.
2. Uva<sup>ˉ</sup>nuva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nu  
Uva<sup>ˉ</sup>urva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nu,  
Uva<sup>ˉ</sup>nurva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nu,  
Uva<sup>ˉ</sup>nuva<sup>ˉ</sup>nuva<sup>ˉ</sup>nu.
3. Huva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>uva<sup>ˉ</sup>nu,

Urvaˉuvaˉuvaˉnu,  
 Nupvaˉuvaˉuvaˉnu,  
 Nuvaˉuvaˉurvaˉnu.

このような歌詞が続くが、何のことだかよく分からない。チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) の意見では、これは「マフネク-ヘツイレ (Makhneku-khetsire, Махнеку-хецире)」と呼ばれ、ユーカラ (yúkara, ю́кара)<sup>(96)</sup> でも、シノフツヤ (sinókhtsya, синóхця)<sup>(97)</sup> でも、ハウキ (kháuki, хáуки)<sup>(98)</sup> でもない。

16. カムイ-アシニケ (Kamuj-asin'ke, Камуй-асиньке) 「熊送りの祭り」。この祭りの時、アイヌは近隣の村の住人、親戚や知り合いを招く。酒や贈り物を当てにして、ロシア人や日本人の将校も招く。招かれてやって来るアイヌは、ふつう、食用や酒を作るための米をもってくる。しかし、その米は、普通いつも少ない。この祭りは次のように行われる (11月の満月の時に)。

a)ヌマン-ニヤト (Núman-niyáto, Нүмань-нято) 「祭りの前日」。この日は、その前の夜と同様に、輪踊りをして過ごす。この踊りでは、男の輪踊りと女の輪踊りは別物である。男の踊りで際立っているのは、鳴き声、うなり声、吼え声などの「熊の声を並外れて上手くまねる技」である。女の踊りは、尻を強く突き出すことで (アイヌさえも) 笑いを起こさせる。この日に酒は飲まれるが、多くではない。

b) オシリコトヌ-ウクラン (Osirikotonu-ukuran, Оси́рико́тону-укура́нь) 「祭りの前夜」。その夜は眠らない。夜中、前夜のように家の中でなく、熊の檻のまわりで、輪踊りや唄で過ごす。酒はほんの少しだけ飲む、しかも賓客だけが。他の者には酒は出されない。朝が来る前に、唄と踊りは中断され、アイヌは熊の前でしゃがんだり、跪いたり、ひれ伏したりして、熊のために泣く。このとき、彼らはしばしば大量の涙を流す。男は鼻汁が髭につららとなって凍る。殺される熊を悼んで泣くのである (罪を感じてではない)。

c) カムイ-アシニ-ト (Kamuj-asin'-to, Камуй-асинь-то) 「熊送り当日」。朝9時ないし10時頃、熊の腹または胸を縛る二重の輪がかぶせられる。檻の上部の骨組みの丸太と天井の代わりをする丸太の格子材との間に、革紐 (指の太さくらいのトドの皮製) が檻の両側から通される。その時、2人のアイヌが檻の上に飛び上がり、檻の格子材を外し始める。最後の列の格子材にかかるやいなや、熊は矢のように素早く檻の上部に飛びかかり、自分で最後の格子材を投げ飛ばし、熊はとても素早く檻から飛び出そうとするので、檻の上に立っていた者たちは、どうにかこうにか飛び降り、革紐を握っている者たちは、熊が遠ざかろうとする方向の革紐を引っ張って、かろうじて熊を抑えることができるくらいである。そういう時、ずる賢い熊

(96) 本辞典 p.472, 10601 番目の語として掲載されている。「歌、歌うこと」の意。

(97) 本辞典 p.295, 6638 番目の語として掲載されている。「踊りを伴う歌」の意。

(98) 本辞典 p.396, 8871 番目の語として掲載されている。「アイヌの言い伝えを含む歌」の意。

は、アイヌを欺くことがある。熊は、一方から抵抗があることを感じると、反対の方向から革紐を引くよりも前に、抵抗がある方へ襲い掛かり、ときには、誰かを捕まえ、噛み付き、引っ掻くこともある。しかし、ふつう、熊の口に棒が突っ込まれて、刺激を与えられる。そして、熊がこの棒をくわえて、かじり始めた時、腕の立つ者の中の誰かが熊の首を掴むと、一斉に大勢のアイヌが熊に襲いかかり、耳をつかんだり、足をつかんだりする。このとき、熊にオリコン (orikõn, орикõнь)<sup>(99)</sup> という草で作られた帯が掛けられる。これはアイヌ語でイソ・エクフ・クンテ (Isò ekuf-kunte, Исò экуфь-кунте), つまり「熊に帯を締める」と呼ばれる。この帯は、グトゥレブ (Gùturep, Гүтурепь) あるいはエノヌカ (Enónuka, Энóнука) といったイチゴ類の赤い汁で染められている。熊は、そのあと、耳輪やススニ (susuni, сусуни)<sup>(100)</sup> の木でできたイナウ (inau, инау) で飾られる。このことは、チブイノフ・コンテ (Chibújnox konte, Чибуйнох контэ) という術語で表される。このようにして飾られた熊は、革紐をつけて、イナウチュボ (Ináuchubo, Инаучубо) へ連れて行かれる。イナウチュボとは、生贄となる熊(山の神ではなく)のために制作されたイナウを用いてつくられた半円形の場所である。そのため、このイナウは、イソ-イナウ (iso-inau, исо-инау) と呼ばれている。他のイナウは、この半円形の場所にはない。イナウには、これ以外に、絹織物(錦)、満州の刀が吊るされる。イナウチュボの中心には、祭りの当日、上部がフォーク状に分かれた節のない木が置かれる。フォーク状の部分に削りかけで飾られるこの木は、トゥクシ (Túkusi, Түкуси) またはトゥクシ-イナウ (Túkusi-inau, Түкуси-инау) と呼ばれている。イナウチュボへ熊を導く過程は、アイヌ語でアトゥ-アンパ (Atù-ámpa, Атү-áмпa) 「綱(革紐)をつけて連れて行く」と呼ばれる。ここで、熊はトゥクシ (Túkusi, Түкуси) に繋がれる。このことをアイヌ語でトゥクシ・オフト・ムイエ (Túkusi okhtá mujyè, Түкуси охтá муйè) と言う。アイヌの弓の名手が弓矢をとり、普通は、一矢で熊を殺してしまう。その際、熊は突き刺さった矢を折ることしかできない。そのとき、祭りの年長者の一人(あるいはシャーマン)がイオリタコ-イナウ (joritako-inau, йоритако-инау) 「イナウで飾られた長い棒」を取る。そして、「射られた熊の上方でそのイナウを振りながら、小声で祈りを呟く」。これは、イオリタク (joritáku, йоритáку) という術語で表される。その後、3, 4人のアイヌが(触ったり、動かしたりして)熊が本当に死んだということを確認した後、熊の傍らにうつ伏せで横たわり、最後に熊の死を悼んで泣く。それから、イソ・トゥリエ (isò triyè, исò триè) 「熊から皮を剥がす」が行われ、斧ではなくナイフでイソ・トゥルクンパ (isò trukúmpa, исò трукúмпa) 「熊を細かく切り分ける」が行われ、煮るために持っていかれる。切り取られた頭は、このとき主人の家に運ばれ、ルルヴソ (rúruvso, рýрувсо) 「前面」に置かれる。そ

(99) 本辞典 p.229, 5151 番目の語として掲載されている。「沼に生育する草, ベッサムシ (pessamùs', пессам ýсь) に似ている」の意。

(100) 本辞典 p.311, 6993 番目の語として掲載されている。「(おもに低木性の) ヤナギ」の意。

の後、殺された熊の肉を食べ、一日中酒を飲み、踊る。

d) 熊祭りの翌日は、ルスィカラト (Rus'kara-to, Руськара-то) と呼ばれるが、その日には熊の毛皮や頭がきれいにされる。この日も同じように酒を飲んで過ごす。

e) 3日目は、サバ-マカンケ-ト (Saba-makánke-to, Саба-макánке-то) あるいはケイ-マカンケ-ト (Kej-makánke-to, Кей-макánке-то) と呼ばれる。この日は正午までは酒が飲まれ、正午に熊の頭骨が山の方角にある森へ持って行かれる。チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) が言うように、「酒がないので」飲酒は完全に中断される。

この祭りはアイヌの近隣の民族、オリチャ (Ol'cha, Ольча) やアムール川のギリヤークによっても行われる。オリチャは、この時、イナウも使う。シユー (Syu, Сю) 河口の近くにあるシスイカ (Sis'ka, Сиська) には、アイヌのところにあるのと同じようなイナウシ (ináusi, инáуси)<sup>(101)</sup> (とても大きい) がある。しかし、これは、オリチャのものであり、アイヌのものではない。ギリヤークは、この目的で捕まえたり、アイヌのところで買ったりした小熊をサハリン島からアムール川へ毎年連れてくる。アイヌは小熊を捕らえることでは、オリチャよりも熟達し、勇敢である。

17. 友人になったチヴォカンケは、自らがソヤ-ウンタラ (Soya-úntara, Соя-ýнтарa) から聞いた内容を打ち明けた。チュヅカ-ウンタラ (Chúvka-úntara, Чúвка-ýнтарa) が日本人にはピヌフボネ (pinufpone, пинуфпоне) 「内緒」で、森の中にある川の上流で今も人を焼いているということだ。

18. ペプトウ (Péputu, Пéпту) とヒ-イヒ (Khi-ikhi, Хи-ихи) の間に、あるとき争いがあった。その争いの中で、ペプトウは二人のシャーマンの神を見た。彼らはペプトウに向かって矢を射って、その一本が当たった。矢はそのあとひとりでに抜け落ちて、彼は事なきを得た。もしトウス-カムイ (tusù-kamùj, тусу-камуй)<sup>(102)</sup> がシャーマンの命令でシャーマンでない者を矢で射った場合、矢を抜くことができるのは別のシャーマンである。そうしないと、アイヌはたちどころに死ぬ。シャーマンの神の矢は傷を作らない。シャーマンは、この矢以外にも、病人の内臓から様々な病気をも取り出す。

19. トセ (Tóse, Tóce) はイナウ (ináu, инáу) で巻かれたものである。シャーマンのコフコ (Kokhkò, Кохкò) は、最近、チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) の妻の弟であるツィスイカヤンケ (Tsis'kayánke, Циськаянке) の胸の肉からそのようなトセを取り出し、ここに「シュルク (syuruku, сюрुकy)<sup>(103)</sup>」があるということを示した。取り出すとき、彼は傷を残さなかつ

(101) 本辞典 p.86, 1843 番目の語として掲載されている。「(村の近くや高台に) イナウを集めること、集めている場所」の意。

(102) 本辞典 p.353, 7909 番目の語として掲載されている。「シャーマンによって呼び出される神々」の意。

た。シャーマンの神々は、コフコにこの毒をいれたのはウイルケ (Ujrukye, Уйруке) だと告げた。チヴォカンケの妻の父親のアンチプニ (Anchiruni, Анчипуни) は、このことに対して、ウイルケにアシンペ (asimpye, асинпе)<sup>(104)</sup> を要求し認められた。

20. **㊦** アシスイ-チュフ (Asis'-chuf, Асйсь-чуфъ) あるいはポニ-チュフ (Pón'-chuf, Пóнь-чуфъ)。イナウが作られる。
- ㊦** スクフ-チュフ (Sukuf'-chuf, Сукүфъ-чуфъ)。
- ㊦** チクナサ-チュフ (Chikúnasa-chuf, Чикүнаса-чуфъ)。上弦の月。
- ㊦** ナスクフ-チュフ (Nasukuf'-chuf, Насукүфъ-чуфъ)
- スクフ-ヘマカ-チュフ (Sukuf-khemaka-chuf, Сукуфъ-хемака-чуфъ) あるいはシカリスイ-ヘマカ-チュフ (Sikáris'-khemaka-chuf, Сика́рись-хемака-чуфъ)。イナウが作られる。
- ㊦** チュフ-シゲケム (Chuf-sigekem, Чуфъ-сигекёмъ)。イナウが作られる。
- ㊦** セケム-チュフ-ノスキ (Sékem-chuf-nóski, Секемъ-чуфъ-но́ски)。下弦の月。
- ㊦** ニニ-チュフ (Nin'-chuf, Нинь-чуфъ)
- ㊦** チュプ-イシャム-ヘマカ (Chup-isyám-khemaká, Чупъ-ися́мъ-хемака́) あるいはチュブトゥル (Chubúture, Чубу́туру)。新月。イナウを作るのは罪。
21. 一月, アイヌはあらゆる神々のためにイナウを作る。ウンチ-イナウ (Unchi-ináu, Унчи-ина́у) は、決まりはなく、思い立ったときに作られる。
22. アイヌのシャーマンの神々の中には、奇術の神がいる。ヘツイレ-カムイ (Khétsire-kamùj, Хэ́цире-камү́й) あるいはヌブル-カムイ (Nuburu-kamuj, Нубуру-камү́й) あるいはヘツイレ-コスンプ (Khetsire-Kosúmbu, Хэ́цире-Косү́мбу) である。奇術をやってみせるシャーマンは、アイヌ語でヘツイレ-カムイ・カラ・アイヌ (Khétsire-kamùj kara ájnu, Хэ́цире-камү́й кара айну), つまり奇術の神を支配する者, あるいは, 短縮してヘツイレ-トゥス-アイヌ (Khyetsiryetu-susu-ájnu, Хэ́цире-тусу-айну), つまり奇術師のシャーマンと呼ばれている。アイヌの奇術師の例として, 次の者を挙げることができる。縛られたヘロッキ-エク (Kherókki-eku, Херо́кки-эку) は, 暗闇でその縄を解く。ペプトウ (Peputu, Пепу́ту) は, スス-カブ (susu-kabù, сусу-кабү) 「柳の木の樹皮でできたビーズ」を本物のビーズとかタバコに変える。奇術をやってみせることは, アイヌ語でチムイエ・カムイ-カラ (Chimujè kamùj-kara, Чимуйè камү́й-кара)

(103) 不明。

(104) 本辞典 p.25, 430 番目の語として掲載されている。「侮辱, 不当な仕打ちにたいする償い」の意。

あるいはヘツイレ-カムイ・カラ (Kétsiryé-kamùj kara, Хэцире-камуй кара) と呼ばれる。もし人がコスンプ (Kosumbu, Косумбу)<sup>(105)</sup> を目にとると、たちまちに死んでしまう。聞こえるのは、シャーマンの神々の足音だけである。

23. アトゥイ-コロ-カムイ (Atuj-koro-kamuj, Атуй-коро-камуй)<sup>(106)</sup> 「鯨の一種、鯨に似た生き物 (イルカか?)。文字通りは「海の君主たる神」。海を進んでいく時、供物として、イナウが捧げられる。

24. チヴォカンケ (Chibokanke, Чивоканке) は、アイ (Aj, Ай) 村の近くで、冬、ヴェン-オヤシ (Ven-oyási, Вень-ояси)<sup>(107)</sup> という火を見かけた。それは、暗くなると、大きなチャフタク (Chákhtaku, Чáхтаку)<sup>(108)</sup> のように見えた。彼が犬の耳を切って、そばを通り過ぎ始めた時、オヤシ-ウンチ (oyási-úncí, ояси-ýнчи) は見えなくなった。しかし、そのあと再び現れて、前方からオトサン (Otosan, Отосан)<sup>(109)</sup> のすぐそばまで、さまざまな場所で見えた。

25. カンナ-カムイ (Kánna-kamùj, Кánна-камуй) 「雷の神」。リスィター-カムイ (Ris'ta-kamùj, Рíсьта-камуй)<sup>(110)</sup> ではない。

26. 雲の中に様々な姿 (動物、山など) を生みだすのは、特別なカムイ (kamuj, камуй) である (ニシヨフツィカラ (Nisyokhtsikara, Нисёхцикара)<sup>(111)</sup>)。

27. アトゥイ-カムイ (atùj-kamùj, атуй-камуй) 「海の神、海の動物」という言葉は、アイヌによって、すべての大きな海の動物 (とくに、トド、ワモンアザラシ、鯨、イルカ) に添えられて用いられる。海の神々の中に、海での漁の管理をつかさどる神が一人いる。そして、漁の成功はその神一人に懸かっている。その神には供物としてイトウの下顎が捧げられる。

28. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) は、最近ヴェン-オヤシ (ven-oyási, вень-ояси) とヴェン-オヤシ-グム (ven-oyasi-gum, вень-ояси-гумъ)<sup>(112)</sup> の呼び名を言わなくなり始め、オヤ

(105) 本辞典 p.146, 3267 番目の語として掲載されている。「シャーマンの神」の意。

(106) 原文のまま。

(107) 本辞典 p.49, 946 番目の語として掲載されている。「狂気を引き起こす悪魔, 邪悪な悪魔」の意。

(108) 本辞典 p.418, 9416 番目の語として掲載されている。「油をともし灯明皿, ランプ」の意。

(109) 本辞典 p.235, 5278 番目の単語として掲載されている。「(地名) マヌヤの南方 33 露里に位置するアイヌと日本人の混住の村」の意味。

(110) 本辞典 p.275, 6176 番目の単語として掲載されている。「天の神」の意味。

(111) 本辞典 p.195, 4386 番目の語として掲載されている。「特別な神によって生み出される雲の中の姿 (絵) を提示すること」の意。

シ (Oyashi, Ояси)<sup>(113)</sup> とオヤシ-グム (Oyashi-gum, Ояси-гумъ) という言葉に取り換えるようになった。それは、私が他の情報源から得たものとは一致しない情報のように思われる。私が得た情報によると、オヤシとヴェン-オヤシはお互い厳密に区別されている。

29. 主なアイヌの神々は次のとおりである。

1. チュフ-カムイ (Chuf-kamüj, Чуфь-камуй) 「すべての天体の神」; 月に住む。新月ごとに彼は生まれ、成長して少年になり、大人の男になる。そして、月が欠けるときは、老人となって死んでいく。すべての神々の中で、チュフ-カムイだけが女性と犬を持つ。月へ去るときに、女性と犬を奪ったのである。
2. ヌブリー-カムイ (Nuburi-kamuj, Нубури-камуй); チュフ-カムイとほぼ同じほど偉大な神であり、もしかしたら、同等かもしれない。
3. トイ-カムイ (Toj-kamüj, Той-камуй) は、ポフナ-コタン (Pohna-kotan, Похна-котань) に住む。しかし、それがどんなコタンなのか、人間のコタンなのか、特別なコタンなのか分からない。もし、この神が指一本でも動かすなら、崖の方々にひびが入り、島全体が揺れ、家々も揺れる。この神はポロ-カムイ (porò-kamüj, порò-камуй) (偉大な神) である。

30. イナウ (Ináu, Инáу) は削りかけのついた棒または小棒である。それらは様々な神へ、様々な場合に捧げられる。たとえば、病気にかかった時や病気が治った時など。カシトゥル・チュコフテ (Kasiturù Chúkokhte, Каситурү Чүкохте) の妻が重い病気から回復した折に、彼女がイナウをつくるのを目にした。イナウは、捧げる神によって異なる。例えば、火の神にはウンチ-イナウ (ünchi-ináu, үнчи-инáу), 山の神にはヌブリー-イナウ (núburi-ináu, нубури-инáу), 年長の家の神にはティシエ-イナウ (tishè-ináu, тишè-инáу) など。いけにえにされる熊に与えられるイソ-イナウ (iso-ináu, iso-инáу) やシャーマンの神々のために作られるシャーマンのイナウ〈タクサ (tákusa, такуса)〉もある。イナウの各部分は次の通りである。

1. エプシスイ (Epusis, Эпусись) あるいはイナウ-サバ (ináu-saba, инáу-саба) 「イナウの頭部」; エトフコ (étokhko, этохко) 「頭のとっぺん」やイナウ-サバル (ináu-sabarù, инáу-сабарү) 「髪の毛」や、ときには、ニニカリ (nín'kari, нинькари) 「削りかけの縄で作った耳輪」などが付く。
2. トウレクフ (trekuf, трекуфь) 「首」。
3. テキ (teki, гэки) 「手 (複数)」。
4. 胴は、コトロ (kotorò, которò) 「(体の) 前面」とニギンパ (Nigimpa, Нигимпа) あるいは

(112) 本辞典 p.353, 7909 番目の語として掲載されている。「邪悪な悪魔の足音」の意。

(113) 本辞典 p.242, 5432 番目の語として掲載されている。「悪魔, 悪霊」の意。オヤシ-グム (Oyashi-gum, Ояси-гумъ) は、「悪魔, 悪霊の音」の意。



ニチシ (nichishi, ничиши)「道具の柄, 握り, 足 (複数)」に区別される。コトロには, ヌサ・コトルゲ (nusa kotorgè, нуса которгè)「体毛」, トフパ (tókhpá, тóхпа)「刻み目, ざざざ」(腹の切開を表す)とケフパ-ケフパ (kyékhpa-kyékhpa, кéхпа-кéхпа)「短い削りかけ」が付いている。なお, ケフパ-ケフパは, 刻み目から上下に走り, 上下に切開される腹の前壁の柔らかい部分〈ゴントウラキサラ (góntrakisara, гóнтракисара)〉を表す。

これらの体の部分から判断すると, イナウは明らかに人をいけにえに捧げる儀式の名残りである。

31. アイヌは, 一杯目の酒の前に心の中で祈りを捧げ, イクニスイ (ikúnis', икúнись)<sup>(114)</sup>を杯の上方に持ち, その後, この匏で杯の上方の空気を二度撫でるようにし, 神(村の守護神)への捧げものとして匏で一滴の酒をすくう。そして, イクニスイから酒の雫が流れ落ちるか落ちないかにかまわず, 手を脇にやる。最後に髭を持ち上げて盃を飲み干し, 最後の雫は人差し指で拭って, それを舐める。そのため, このことはイケ-ムンベ (ike-múmpe, ике-мúмпе)<sup>(115)</sup>とも呼ばれる。終わりに, 匏を杯の上に置いて, 主人への感謝の印に盃を額に近づけ, それを次の者に渡す。

32. アイヌの神々は平等であり, 互いに独立している。神々の本質や暮らしについてアイヌは何も知らない。良い神(海の神, 天体の神, 山の神, 家の神, 火の神, 外の神, 天の神, 守護神)には供物を捧げる。悪い神には捧げない。悪い神というのは, すなわち, オヤシ (Oyasi, Ояси), ヴェン-オヤシ (Vuén-Oyasi, Венъ-Ояси) およびカンナ-カムイ (Kanna-kamúj, Канна-камúй)である。後者の神には供物を捧げない。ウコイキ・ポロ (ukojiki porò, укойки порò), つまり, 「激しくけんかをする」から。

33. カシャ (Kasya, Кася)「縁の広い祭り用の藁の帽子」, 縁に鯨の髭が縫いつけられ, その髭の四本の筋が縁からモラプグ (morápgu, морáпгу)「帽子の上部の輪」まで届いている。上からと横からの外観は次のようである。



34. シルブシスイ (Sirúbusis', Сирúбусись)<sup>(116)</sup>は, 私への個人的な説明の中で, 死んだ若い女を自分で生き返らせたという話を否定した。娘の背中越しに, 彼が冷たい水の入った杯の中にあ

(114) 本辞典 p.82, 1753 番目の単語として掲載されている。「酒を飲むとき口ひげを支える匏」の意味。

(115) 本辞典 p.78, 1655 番目の単語として掲載されている。「人差し指」の意味。

(116) 本辞典 p.300, 6729 番目の語として掲載されている。男性の名前である。

る彼女の魂を注ぎかけると、指がびくびく動き始め、次に手足が、そしてついに生き返ったと言う。

35. シャーマンのペプトウ (Pep̄tu, Пэ́пту) の奇術；ペプトウは、どもりの逃亡者パゴ (Pagò, Парò) の親戚である。ペプトウは、内臓から病気 (赤い肉の形状で) を吸い出した。カムイが彼にビーズやタバコを与え、彼はそれをその場にいる者たちに配った。彼が自分に向けて矢を射らせると、カムイはカニ (kani, кани) 「鉄の鏃」を奪った。その結果、矢柄だけが地面に落ちた。その後、ペプトウはその場にいるアイヌの一人を立たせると、その者の衣服の中からカニが足の間に落ちた。彼は口から火を吹き、銅の煙管を鎚で打ち砕き、それを口にふくみ、もとの姿で取り出す。針を折って、それを口にふくみ、もとの姿で取り出す。彼の手足が縛られると、シャーマンの神々が消えた灯火のもとにいる彼のところへ行き来して、その縄を解いてくれる。空っぽの底のない桶シントコ (sintoko, синтоко) で水を汲み、その場の者がみなそれを飲むが、水はこぼれない。
36. ポフナ-コタン (Pókhn̄a-kotàn, Пóхна-котàнъ) では、邪悪な人間はヴェン-カムイ (ven-kamuj, венъ-камуй) とともに苦しむ。ある者は絞首刑にされ、またある者は熱湯に入れられる。
37. 「タン-モシリ・シカスイマ・カムイ, タン-コタン・シカスイマ・カムイ (Tàn-mósiri sikás'ma kamuj, Тан-kotan sikas'ma kamuj, Tànъ-móсири сика́сьма камуй, Танъ-котанъ сикасьма камуй)」という言い回しから、アイヌのところでは守護神が数限りなく多くいるという明確な結論がでてくる。
38. 「リスイタ-カムイ・フンミ (Ris'ta-kamuj khúm̄mi, Рисъта-камуй х́умми) 「高いところにいる神の音 (雷鳴)」という言い回しは、リスイタ-カムイ (Ris'ta-kamuj, Рисъта-камуй) とカンナ-カムイ (Kánna-kamuj, Кánна-камуй) を同一視しているか、構成がただしくないかのどちらかである。
39. イナウ-トゥレクフ (inau-trekūf, инау-трекуфъ) 「イナウの首」から上には、短い刻み目が走っている。これは、いくつもの腹が「初期の頃」切開をされていた可能性があるということを示している。
40. シャーマンの呼び出しでシャーマンの神たちが現れ、音をたてて飛び始める。それは空気中で細い枝がつくり出すような音である。それは神たちだけが理解できる言語である。この後、シャーマンは、神々によって指定された薬を病人に告げたり、誰かに、その人の運命 (普通は

幸せなもの)を告げたりする。

41. ウンチ-イナウ (Unchi-ináu, Унчи-инау) は、かまどの前面の隅に置かれる。その数は12ほどである。古いものは専用の置き場に運び出される。
42. チトゥカンニ (Chitukánni, Читукáнни) は、最近までシルツィスイ (Sirútsis', Сирúцись) の近くにあった。シルツィスイは、クスナイ (Kusunaj, Кусунай) とマヌヤ (Manuya, Мануя) の間の峠にある越冬場所である。
43. もともと男たちは別に住んでいて、妻はなかった。イヌヌ-モシリ (Inónu-mósiri, Ино́ну-мо́сири) あるいはカムイ-モシリ (Kamùj-mòsiri, Камùй-мо́сири) と呼ばれる或る島に、女たちも別に住んでいた。その女たちの性器には歯があり、そのためオイマクスィ-マフネク (Ojmakus'-makhnekù, Оймакусь-махнекù) と呼ばれた。男たちは、その歯を砥石で削って、彼女たちと性交した。その後、現在の状況が始まった。以前は、男は女のもとに自分の性器を残す恐れがあった。